

# 我が国における精算表の発展に関する一考察

～精算表と商品売買の処理法を中心に～

遠藤 耕二<sup>a</sup>

## 要 旨

我が国の簿記教育は、1873（明治6）年の福沢諭吉の『帳合之法』から始まったといっても過言ではない。この『帳合之法』は、米国の簿記教科書の翻訳書であるが、この中には、今日の精算表のルーツにあたる「パッカルド氏取用の平均表」が掲載されている。明治初期に複式簿記の高度な仕組み、特に精算表が世界に遅れることなく日本に紹介され、その後、この精算表を通して、複式簿記の仕組みが広まっていった。このことは、わが国の会計実務および簿記教育の発展に大きく貢献した。本稿では、『帳合之法』に始まる日本における精算表の発展の過程を辿り、その大きな流れを明らかにする。また、海外、特に米国からの複式簿記および精算表の知識が、どのように日本に伝わってきたのかについても検討を行う。<sup>1</sup>さらに、精算表の発展とともに商品売買処理法も進化していくが、精算表上での様々な処理法の変遷を辿りながら、どのように今日の標準的な精算表が形成されていったのかを明らかにする<sup>2</sup>。

キーワード：帳合之法、パッカルド氏取用の平均表、精算表、決算整理、商品売買処理法

## 1 はじめに

A.C.リトルトンが『1900年までの会計発達史』において「光ははじめ15世紀に、次いで19世紀に射したのである」（片野訳、1978,493）と述べている。つまり、これは、15世紀に『スママ』が出版されたこと、19世紀のイギリスでの産業革命期に簿記が会計へ進化していくことを指している。

簿記の発達の発端は、複式簿記を解説した最初の印刷書籍とされるルカ・パチオーリ（Luca Pacioli）の数学書『スママ（算術幾何比および比例総覧）』（1494）が15世紀にヴェネツィアで出版されたことである。また、『スママ』が各国の言葉に翻訳されることで、簿記に関する研究が始まったと思われる。

この西洋簿記が我が国に導入されたのは、明治以降である。主に複式簿記を紹介した簿記書が出版されたことが日本において簿記教育が始まるきっかけとなった訳であるが、『帳合之法』をはじめとした簿記書は、英米の簿記書を翻訳する形で日本に入ってきたものである。つまり、明治初期の簿記書は19世紀の英米の簿

記書の翻訳から始まったため、日本における簿記教育は英米の簿記書の影響を受けることになる。

わが国の簿記教育は、1873（明治6）年の簿記書から始まったといわれる。その一つは、福沢諭吉の『帳合之法』（初編1873〔明治6〕年、二編1874〔明治7〕年）であり、もう一つはアレキサンダ・アラン・シャンド（Alexander Allan Shand）の『銀行簿記精法』（1873〔明治6〕年）である。しかし、「商業簿記の教科書」として日本の簿記教育に大きな影響を与えたのは、やはり福沢諭吉の『帳合之法』といえるだろう。

この『帳合之法』は、米国の簿記教科書であるブライアント&ストラットン（Bryant & Stratton）の“Common school Book-Keeping”が原書であるが、この簿記の考え方がその後の日本の簿記教育に大きな影響を与えていくことになる。それは、何よりも日本で最初の「商業簿記の教科書」だからである。

『帳合之法』には、明治初期の簿記書でありながら、現代の簿記教科書でも必ず取り上げられる精算表の原型と思われる「パッカルド氏取用の平均表」がすでに

a 武蔵大学経済学部 助教

<sup>1</sup> 精算表の歴史の先行研究としては、安平（1992）、小島（1961）、横山（1994a）、五十嵐（2005）、渡邊泉（1993）、横山（1994a）等多数あるが、日本における精算表の足跡と海外からの影響を共に扱ったものはない。

<sup>2</sup> 商品売買の研究の先行研究としては、野田（2024）、原（1997）、中村（2017）、森田（2012）など多数あるが、精算表の整理記入欄の視点で過去から考察したものはない。

掲載されている。これは、まさに現在の精算表の日本における源流と位置づけることができる。

現代の日本の簿記教育において、精算表の学習は複式簿記の構造を理解するうえで極めて重要とされている。その精算表の萌芽が、日本における最初の商業簿記書である『帳合之法』にすでに示されていることは、注目に値する。

本稿の目的は、『帳合之法』に内在する日本における精算表のルーツを明らかにし、その発展過程を明治初期に遡って考察することである。あわせて、その源流となるブライアント&ストラットンの原書をはじめとする米国簿記書を検証し、西洋における精算表の発達過程と、日本への導入経路を明らかにする。さらに、その後の日本の簿記書における精算表および商品売買計算手法の展開を考察する。

本稿の構成は、第2節では、『帳合之法』における精算表を説明する。第3節では、『帳合之法』の精算表がその後の簿記書に与えた影響として、棚卸欄を用いた精算表について説明する。第4節では、その後の精算表の発展として、修正記入欄を備えた精算表について説明する。第5節では、精算表における様々な売買損益計算法について、第6節では、精算表の誕生について概観する。第7節では、米国から日本に伝播した精算表の系譜について説明する。第8節では結論を述べる。

## 2 『帳合之法』における精算表

### (1) 帳合之法のパッカルド氏専用の平均表（精算表）の特徴

現代の日本の簿記の教科書において、精算表を扱っていない教科書はまずない。初学者の簿記教育における精算表の重要性については、言うまでもないであろう。そこでわが国の簿記教育の原点の教科書として、福沢諭吉の『帳合之法』を考察したい。それは一般商家を対象とした「商業簿記の教科書」として『帳合之法』が日本の簿記教育に大きな影響を与えたと考えられるからである。

この『帳合之法 - 二編』の内容で、特に目につくのは現在の精算表の原型と思われる計算表である。ここでは我が国における精算表の変遷と発展の経緯、そのルーツについて検討することにする。

前述のように『帳合之法 - 二編』には「パッカルド氏専用の平均表」<sup>3</sup>という計算表が掲載されている。これは、まさに現在の精算表のルーツとも言える多桁式一覧形式の計算表である。現代の簿記教育においては、精算表の学びは複式簿記の仕組みを理解するためにとっても重要である。その萌芽が日本における最初の商業簿記の教科書である『帳合之法』に掲載されているのである。

この「パッカルド氏専用の平均表」には、現在の精算表とほぼ同様の機能が含まれている。周知のように『帳合之法』は米国のブライアントとストラットンの“Common school Book-Keeping”を福沢諭吉が翻訳した

【図表 1】 福沢諭吉『帳合之法』（1874）のパッカルド氏専用の平均表

(福沢諭吉訳『帳合之法 - 二編』(1874,23))

<sup>3</sup> 今日の精算表にあたる「パッカルド氏専用の平均表」は『帳合之法』二編の23頁に記載されている。

〔図表2〕 井田忠信『簿記學捷徑』（1876）の商景一覧表

（井田忠信『簿記學捷徑』（1876））

ものであるが、その原書においても、同じものが掲載されている。この「平均表」の特徴は、以下のとおりである。

形式的には、横書きではなく、縦書きの形式となっている。また、その下に、平均の改（合計試算表）、名目（損益計算書）、元入（資本主：資本金）、事実（貸借対照表）の順になっている。数字は縦書きで漢数字だが、零（ゼロ）を用いて計算しやすい様式となっている。

(2) 帳合之法のPACKALD氏取用の平均表（精算表）における商品売買益の計算

帳合之法の「PACKALD氏取用の平均表」（精算表）においては、どのようにして商品売買益を計算しているだろうか。この精算表では整理記入欄ではなく、仕入残品（Inventory）欄を設けており、ここに実地棚卸高を記入することで、品物の行で商品売買益を総記法で計算する方式を採用している。

つまり、品物勘定の行の、平均の改（合計試算表）欄にある商品仕入高¥2,945.50（原価）から商品売上高¥1,178.55（売価）を差し引き、さらに仕入残品欄に記入された実地棚卸高（期末商品棚卸高）¥2,500.00を差し引くことによって、商品売買益¥733.05を算出しているのである。

この商品売買益¥733.05が名目欄の貸方に記入され、その金額から雑費（営業費）¥200を差し引くことによって、正味利益（純利益）¥533.05を算出し、その利益

を元入欄の貸方に移記する。さらに、この正味利益¥533.05に元入欄の¥1,570を加えて、正味元高（期末資本）¥2,103.05を計算し、これを事実欄の貸方に移記している。それぞれの欄の合計が一致する形で検証できる一覧表形式の計算表となっている。この時代になり高度な精算表の機能を実現しているといえる。

3 帳合之法の精算表がその後の簿記書に与えた影響 ～棚卸表を備えた精算表～

3.1 井田忠信『簿記學捷徑』（1876）

(1) 井田忠信の商景一覧表（精算表）の特徴

『帳合之法 - 二編』が1874年に出版されてから2年後の1876年に井田忠信は『簿記學捷徑』を出版する。この『簿記學捷徑』は福沢諭吉『帳合之法』の原本でもあるブライアントとストラットンの『Common school Book-Keeping』を参考にして、日本の学習者に向けてまとめた著作である。井田は帳合之法を参考としたのはもちろんだが、それに加えて新たな工夫も加えている。『簿記學捷徑』には精算表にあたる「井田忠信商景一覧表」を掲載しているが、「PACKALD氏取用の平均表」を参考としたことが把握できる。

これによれば、「平均の改」が「試算」に、「仕入残品」が「残品」に、「名目」が「仮勘定」に、そして「元入」が「資本主勘定」に、「事実」が「実勘定」に、それぞれ変更されている。さらに、仮勘定の項目として「損亡・利益」が「損・益」とされている。また、実勘定の項

目として「元手・払口」が「身代・負債」とされるなど、用語において工夫がなされている。

(2) 商景一覧表（精算表）における商品売買益の計算

商品勘定の行の、試算欄にある商品仕入高¥2,731,000（原価）から商品売上高¥1,706,250（売価）を差し引き、さらに残品欄に記入された実地棚卸高（期末商品棚卸高）¥1,333,500を差し引くことによって、商品売買益¥308,750が算出されている。

この商品売買益¥308,750が仮勘定欄の貸方に記入され、その金額から雑費（営業費）¥184,000を差し引くことによって、純益高（純利益）¥124,750を算出し、その利益を資本主動定欄の貸方に移記する。さらに、この純益高¥124,750に期首資本¥4,500,000を加えて、現在元入高（期末資本）¥4,624,750を算出し、これを実勘定欄の貸方に移記している。前述のとおり、用語において工夫がなされているが、基本的な計算構造は『帳合之法』の「パッカルド氏取用の平均表」と変わらない。

3.2 山田十畝『人民必携簿記提要』（1880）

(1) 山田十畝のパッカルド氏製差引残高一覧表（精算表）の特徴

『帳合之法』が出版されてから6年後、山田十畝は1880年に『人民必携簿記提要』を上梓する。山田は慶應義塾で学んだ福沢諭吉の門下生であり、福沢諭吉『帳合之法-二編』（1874）の「パッカルド氏取用の平均表」を参考とした「パッカルド氏製差引残高一覧表」を掲

載している。<sup>4</sup>

この残高一覧表では、様式が縦書きではなく横書きの形式でアラビア数字となっているのが大きな変更点である。その他、用語では、「平均の改」が「試算表」に、「仕入残品」が「仕入帳」に、「名目」が「名義」に、そして「元入」が「資本」に変更されている。さらに、事実の項目として、「元手・払口」が「資産・負債」とされるなど、現代に近い用語を使用するなどの工夫がなされている。

(2) パッカルド氏製差引残高一覧表（精算表）における商品売買益の計算

この「パッカルド氏製差引残高一覧表」は様式こそ縦書きではなく横書きでアラビア数字ということ以外、基本的な計算構造は『帳合之法』の「パッカルド氏取用の平均表」とほぼ変わらない。

3.3 佐野善作『商業簿記教科書』（1897）

(1) 佐野善作の精算表の特徴

明治時代、日本では西洋式の複式簿記の導入に力が注がれており、福沢諭吉などによる初期の簿記書（『帳合之法』など）が登場した。その後、下野直太郎の『簿記精理』（1895）などが刊行され、日本的簿記概念の導入が図られてきた。その中で、佐野善作の『商業簿記教科書』（1897）は、東京高等商業学校（現一橋大学）の教授として理論と実務を橋渡しする実践的な簿記教育の教材として広く用いられた。

佐野善作『商業簿記教科書』（1897）には〔図表4〕

[図表3] 山田十畝『人民必携簿記提要』（1880）のパッカルド氏製差引残高一覧表

パッカルド氏製差引残高一覧表									
明治十二年二月二十八日/勘定	試算表		仕入帳	名義		資本		事實	
	借方	貸方		損	利益	借方	貸方	資産	負債
資本	1	12500000	11070000					12700000	
受取手形	1	4478000						4478000	
志摩屋	2	1794000						1794000	
金銀	3	11408000	11145500					348000	
商品	4	2945500	1178820	2500000	788050			2200000	
仕掛手形	5	500000	750000						250000
伊賀屋	5	800000	0000000						8000000
伊豆屋	6	808000	750000					58000	
安房屋	6	4095800	8250000						4154200
但馬屋	7	00000						00000	
備中屋	7	180220						180220	
備後屋	8	200000						200000	
雑費	8	200000		200000					
周防屋	8	32400						32400	
隠岐屋	9	82000						82000	
		25144050	45144050						
資本へ借入—真正利益				588050				588050	
				788050	788050				
				差引残へ借入—真正資本		2108050			2108050
						2108050	2108050	0507250	0507250

(山田十畝『人民必携簿記提要』（1880,25))

<sup>4</sup> 西川（1971）p241 参照のこと

[図表 4] 佐野善作『商業簿記教科書』（1897）の精算表

精 算 表						
貸 借 対 照 表						
資 産	損 益 表			貸 借 対 照 表		負 債
	損 亡	借 方	勘 定 科 目	貸 方	利 益	
		272,000	資 本 金	6,080,000		
5,000,000		5,000,000	不 動 産			
5,479,000		7,251,650	商 品	2,940,100	1,167,450	
912,950		1,151,100	現 金	238,150		
			抵 当 付 借 用 金	450,000		450,000
			加 福 力 太 郎	749,000		749,000
150,000		1,270,000	支 拂 手 形	2,220,000		950,000
		500,000	受 取 手 形	350,000		
		302,000	七 海 兵 吉	302,000		
252,070		400,000	高 野 省 三	147,930		
395,272		1,649,270	当 座 預 金	1,253,998		
		2,730	割 引 料	18,072	15,342	
			相 澤 合 資 会 社	3,187,500		3,187,500
	90,000	90,000	営 業 費			
	48,000	48,000	家 事 費			
	3,700		損 益			
			未 決 算 勘 定			3,700
		17,936,750		17,936,750		
	1,041,092		純 利 益		1,182,792	
	1,182,792					
12,189,292			現 在 元 入			6,849,092
						12,189,292

(佐野善作『商業簿記教科書』（1897）より著者作成)

[図表 5] 竹田等『商用簿記学修正』（1901）の精算表（その1）

損 亡	資 産	借 方		元 帳 口 取	貸 方		負 債	利 益
		残 高	合 計		合 計	残 高		
			3,500	資 本 主	11,000	7,500		
	4,732	4,732	8,275	金 銀	3,543			
500		500	6,000	不 動 産	5,500			
			2,000	支 拂 手 形	4500	2,500	2,500	
			1,300	中 井 恒 介	1,500	200	200	
			3,000	商 品	3,525	525		525
5,300	5,300	5,800	請 取 手 形	500				
				割 引	7	7		7
				倉 敷	60	60		60
	250	250	550	安 部 昇	300			
			50	手 数 料	40	40		40
50		50	50	営 業 費				
			30,475		30,475			
		10,832		資 産 合 計	10,282.00	10,832		
	10,282			負 債 合 計	2,700.00		2,700	
550				現 在 資 本	7,582.00			632
				利 益 総 計	632.00			
				損 失 総 計	550.00			
				純 益	82.00			
				純 元 入 高	7,500.00			
				現 在 資 本	7,582.00			

(竹田等『商用簿記学修正』（1901）より著者作成)

のような貸借配置型の精算表が示されている。この精算表では一番内側となるのが試算表であり、これは合計試算表となっている。真ん中の列は損益表（損益計算書）で借方が損亡（費用）、貸方が利益（収益）となっている。そして一番外側が貸借対照表で借方が資産、貸方が負債となっている。なお、この精算表には棚卸欄や資本主欄は存在しない。

損益表の貸方の利益合計¥1,182,792から損亡合計¥141,700を差し引いて、純利益¥1,041,092を計算している。一番外側の資産合計¥12,189,292から、負債の合計¥5,340,200を差し引いて、現在元入（期末資本）¥6,849,092を計算している。

しかし、このような貸借配置型の精算表では、損益表の差額で純利益¥1,041,092を計算し、貸借対照表で現在元入（期末資本）¥6,849,092を計算することはできるが、純利益と期末資本の金額の整合性を検証するには表とは別に検証の計算をしないと確認できないという難点がある。この検証のためには、資本金の貸方¥6,080,000から借方¥272,000を差し引いて期首資本

¥5,808,000を算出し、これに純利益¥1,041,092を加えた金額が、現在元入（期末資本）¥6,849,092となることを確認する必要がある。

## (2) 精算表における商品売買益の計算

この試算表の商品勘定の借方¥7,251,650（原価）から商品売上高¥2,940,100（売価）を差し引き、さらに貸借対照表の資産欄に記入された実地棚卸高（期末商品棚卸高）¥5,479,000を差し引くことによって、商品売買益¥1,167,450が算出されている。

損益表においては、この商品売買益¥1,167,450にその他の利益（収益）を加算して、利益（収益）合計¥1,182,792を算出し、さらにその他の借方の損亡（費用）合計¥141,700を差し引くことによって、純利益¥1,041,092を計算している。

一番外側の貸借対照表の資産合計¥12,189,292から、負債合計¥5,340,200を差し引いて、現在元入（期末資本）¥6,849,092を算出している。前述のごとく、この方式では、期末資本の要素である期首資本と純利益の関係がわかりづらい。

### 3.4 竹田等『商用簿記学修正』（1901）

#### (1) 竹田等の（貸借配置型）精算表の特徴

竹田等は1901年に『商用簿記学修正』を出版するが、この中には[図表5]で示すような貸借配置型の精算表が掲載されている。これは1882年の『商用簿記学』で掲載した縦型精算表を横型に改良したものであり、内容、計算方式等はほぼ同様のものである。当時、横型の精算表が主流となっていたことがうかがえる。

#### (2) 竹田等の（一覧表型）精算表の特徴

竹田等は『商用簿記学修正』においては、前述の貸借配置型の精算表のほかに、[図表6]に示す一覧表型の精算表も掲載している。これは貸借配置型の精算表と同様に、『商用簿記学』（1882）で掲載した精算表を横型に改良したものであるが内容、計算構造等はほぼ同様のものである。

### 3.5 吉田良三『最新商業簿記学』（1904）

#### (1) 吉田良三の精算表の特徴

東京高等商業学校（現一橋大学）出身で米国の簿記会計の影響を受けている吉田良三が1904年に出版した商業簿記の教科書が『最新商業簿記学』である。吉田良三は、[図表7]のような精算表（一覧表型の精算表）を重視し、ほぼすべての簿記教科書に採用した。これ

は『帳合之法』の源流である米国簿記書の流れを受け継いでいると思われる。本書のみならず、その後も、吉田は多くの簿記教科書を世に送り出しているが、その簿記書が教科書として日本各地の商業学校や高等商業学校などで用いられ、その結果、日本において精算表が普及したのではないかとと思われる。<sup>5</sup>

吉田良三は特に慶応出身ではないが、この『最新商業簿記学』（1904）で示されている精算表の基本的計算構造は、帳合之法の「パッカルド氏取用の平均表」の考え方と変わるところはない。この精算表にはまだ整理記入欄はなく、棚卸欄を含んだ7桁の精算表の体裁となっている。

この精算表では『帳合之法』での「平均の改」が「試算表」に、「仕入残品」が「棚卸表」に、「名目」が「損益表」に、そして「事実」は「資産負債表」とされている。なお、「元入」欄がない点は現代の精算表と同様であり、損益表（損益計算書）と資産負債表（貸借対照表）の双方において純利益の一致額を確認できるというしくみは、現在の精算表の構造に近いと考えられる。

#### (2) 精算表における商品売買益の計算

商品勘定の行の試算表欄にある商品仕入高¥5,270.53（原価）から商品売上高¥4,223.26（売価）を差し引き、

[図表6] 竹田等『商用簿記学修正』（1901）の精算表（その2）

	合計		種別	損失	利益	精算表		資産	負債		
	借方	貸方				竹田等				岩永勝己	
						借方	貸方			借方	貸方
竹田等		11,379.24				11,379.24					
岩永勝己		11,379.24					11,379.24				
金	50,365.63	37,527.83						12,837.80			
不動産	9,000.00	12,000.00			3,000.00						
仕拂抵当証券	4,000.00	4,000.00									
割引料並利子	87.30	58.91		28.39							
営業費	80.00	50.00		30.00							
第一銀行	46,019.65	33,958.86						12,060.79			
大	240.00	240.00									
仕拂手形	1,400.00	1,400.00									
官友輔	2,300.00	2,300.00									
受取手形	7,000.00	5,000.00						2,000.00			
受入費		260.00			260.00						
手数料		612.50			612.50						
廣業商會	21,980.75	21,980.75									
山口屋清吉	3,705.00	3,705.00									
保険料	125.00			125.00							
廣業委託品(三)	19,500.00	19,500.00									
獨	2,400.00	2,550.00			150.00						
大阪積送品	1,815.00	2,400.00			585.00						
関西委託品	5,000.00	5,000.00									
神戸積送品	284.00		400.00		116.00			400.00			
	175,302.33	175,302.33	400.00								
竹田等			純益	2,270.05		2,270.05					
岩永勝己			"	2,270.06			2,270.06				
				4,723.50	4,723.50						
			現在資本			13,649.29			13,649.29		
						13,649.29	13,649.29				
			現在資本					13,649.30	13,649.30		
								13,649.30	27,298.59		
								13,649.30	27,298.59		

(竹田等『商用簿記学』（1901）より著者作成)<sup>6</sup>

<sup>5</sup> 簿記会計史研究会（2025）P20 参照のこと。

吉田（1904）は、当時の商業学校の31%（35校中11校）で採用された教科書であった。

<sup>6</sup> 原本では合計（試算表）欄において、貸方/借方となっており、明らかに間違いであろう。また、岩永勝己の利益の持分欄も一行ずれているが、修正した形で掲載している。

[図表 7] 吉田良三『最新商業簿記学』(1904)の精算表

		精 算 表						
		試 算 表		棚卸表	損 益 表	資 産 負 債 表		
元	勘定科目	借 方	貸 方		損 失	利 益	資 産	負 債
1	資本金		6,000—					6,000—
2	現金	8,930.96	5,170.53				3,760.43	
3	営業費	120—			120—			
4	商 品	5,270.53	4,223.26	1,276.41		229.14	1,276.41	
5	大川商店	966.66	966.66					
6	支拂手形		250—					250—
7	営業什器	30—		30—			30—	
8	小川商店	625—	625—					
9	受取手形	1,292.80					1,292.80	
		17,235.45	17,235.45	1,306.41		229.14	6,359.14	6,359.14
					109.14			109.14

(吉田良三『最新商業簿記学』(1904,123))

さらに棚卸表欄に記入された実地棚卸高（期末商品棚卸高）¥1,276.41を差し引くことによって、商品売買益 ¥229.14が算出されている。

この商品売買益 ¥229.14は損益表欄の貸方に記入され、その金額から営業費 ¥120.00を差し引いて、純益（純利益） ¥109.14を算出している。

この精算表では、資本金の行にある期首資本 ¥6,000.00の金額は資産負債欄の貸方に記入され、資産負債欄の合計の貸借差額で純益（純利益） ¥109.14が計算できることになる。よって、損益表の貸借差額で算出される純利益と資産負債表の貸借差額で算出される純利益が一致することを表の上で確認できることになる。つまり、損益表で計算した純益（純利益） ¥109.14を資産負債表の貸方に移記するという発想ではなく、損益表で計算した純益（純利益） ¥109.14と資産負債表の差額で計算された純益（純利益） ¥109.14が一致するという現代の精算表と同様の計算構造と考えることができる。これまでの精算表との違いはこの当期純利益を二方向から確認できることであり、この計算構造は、まさに現代の精算表の大きな仕組みと同様である。

#### 4 その後の精算表の発展

##### ～修正記入欄を備えた精算表～

明治時代、日本においては、一桁の棚卸表欄での商品売買益の計算が主流で、まだ、現代のように二桁の整理記入欄を設けた精算表は見られなかった。その中で精算表の発展に大きく貢献したのが、吉田良三が1914（大正3）年に出版した『最新式近世簿記精義』と上野道輔が1922（大正11）年に出版した『簿記原理』、および中村茂男が1925（大正14）年に出版した『商業簿記講義』だろう。これらの精算表は、2桁の修正記入

欄を備えており、現代の一覧表型精算表の形式につながる大きなステップになったと考えられる。

#### 4.1 吉田良三『最新式近世簿記精義』(1914)

##### (1) 吉田良三の決算表（精算表）の特徴

吉田良三は、前述のとおり、東京高等商業学校教授として、佐野善作や下野直太郎の流れを継ぎ、日本の簿記教育を近代化させた人物の一人であるが、多くの簿記の教科書を執筆する形で当時の高商や商業学校において一覧型の精算表の普及に大きく貢献したといえることができる。

吉田良三が出版した『最新式近世簿記精義』では、今日の精算表に近い形式の決算表を提示している。この決算表は[図表8]で示しているように一覧横型の形式となっており、試算表（残高試算表）、整理表、売買勘定、損益勘定、資本主勘定、貸借対照表で構成される12桁の計算表となっている。<sup>7</sup>

この決算表に設けられている試算表欄は残高試算表となっており、明治期の試算表のほとんどが合計試算表であった状況を考えると現代の精算表に近づいているように思われる。しかし、整理表欄は二桁の整理記入欄のような体裁となっているが、合計を計算する形とはなっていない。つまり、貸借が一致する形式とはなっていないのである。さらにこの欄で、給料、広告料の未払い、保険料の未経過、家屋の減価償却の記入がなされているが、整理仕訳を転記するような形ではないため貸借は一致していない。なお、この整理表には期末商品棚卸高が、商品有高（期末）として記入されており、(売上)総利益の計算は、売買勘定欄で計算している。

売買勘定においては、(売上)総利益が計算され、そ

<sup>7</sup> 吉田は1914年に発行した『最新式近世簿記精義』と同じ年に発行された『近世商業簿記』のp119においては、棚卸表欄で処理する決算表（精算表）も示している。

の金額が損益勘定の貸方に移記されている。その金額から費用の金額を差し引いて純利益を計算している。この純利益は資本主勘定に移記され、資本主勘定で期末資本が計算されている。

(2) 決算表(精算表)における商品売買益の計算

本書においては、商品売買の処理について、商品有高勘定、仕入高勘定、売上高勘定、及び売買勘定で処理している。売買勘定は決算時のみに用いる総勘定元帳の勘定科目で、この勘定で商品売買益(売上総利益)を計算している。決算表においても、売買勘定欄で商品売買益(売上総利益)を計算している。売買勘定欄では商品有高(当初) ¥12,760 に当期の仕入高 ¥85,259 を加えて、売上高 ¥96,664 と商品有高(期末) ¥16,500 を差し引いて、(売上) 総利益 ¥15,145 を算出している。なお、吉田は売買勘定を用いて商品売買益(売上総利益)を計算する方式を英国法、売買勘定を用いないで仕入勘定で商品売買益(売上総利益)を計算する方式を米英国法と説明しており、それによれば、この決算表は英国法ということになる。<sup>8</sup>

売 買 勘 定			
商品有高(当初)	12,760	売上高	96,664
仕入高	85,259	商品有高(期末)	16,500
総利益	15,145		

(著作作成)

4.2 上野道輔『簿記原理』(1922)

(1) 上野道輔の Working Sheet (精算表) の特徴

上野道輔が1922年に出版した『簿記原理』では、[図

表9]のように修正記入欄の入った Working Sheet (精算表)が示されており、これは現代の精算表の形式に近いものである。<sup>9</sup>ここで示されている Working Sheet (精算表)は、試算表、修正記入、貸借対照表、損益計算表の8桁の計算表である。現在の精算表と同様に、修正記入欄には借方欄、貸方欄があり、決算修正仕訳を記入して、貸借合計で検証する形式となっている。また、貸借対照表と損益計算書のそれぞれで純利益が計算されるため、純利益が一致する形で計算の検証ができる現代の精算表と同様のしくみとなっている。ただし、損益計算表よりも貸借対照表が先(左側)といった配置順番の違いは、財産法的発想が優先されているのかもしれない。

(2) Working Sheet(精算表)における商品売買益の計算

商品売買の処理について、商品財産勘定、商品買入勘定、商品売上勘定(三分法)で処理している。この修正記入欄では、次のような記入を行っている。

元帳勘定	Working Sheet							
	試算表		修正記入		貸借対照表		損益計算書	
	借方	貸方	借方	貸方	借方	貸方	借方	貸方
5 商品財産	5,100		6,700	6,700	6,700		5,100	6,700
13 商品売上		19,500						19,500
15 商品買入	16,500						16,500	

この修正記入を仕訳にしてみると次のように考えられる。

[仕訳1] (借) 商品財産 6,700  
(貸) 商品財産 6,700

しかし、上野道輔の『簿記原理』(1922)には、修正仕訳として次のように示されている。<sup>10</sup>

[図表8] 吉田良三『最新式近世簿記精義』(1914)の決算表

勘定科目	試算表		整理表		買入勘定		損益勘定		資本主勘定		貸借対照表	
	借方	貸方	借方	貸方	借方	貸方	借方	貸方	借方	貸方	借方	貸方
得意先勘定	9,269										9,269	
仕入先勘定		7,123										7,123
商品有高(当初)	12,760			12,760								
仕入高		85,259		85,259								
売上高			96,664			96,664						
給料、賃費	3,724		320				4,154					220
建設、保険料	1,300			200			1,100				200	
廣告料、運搬費	2,000		80				2,080					80
貸倒金	1,923						1,923					
家屋修繕	10,000		200				200				9,800	
受取手形	3,670										3,670	
支拂手形		3,200										3,200
資本金(当初)		35,380								35,380		
引出金	2,400								2,400			
銀行預金	5,400										5,400	
現金	622										622	
商品有高(期末)				16,500		16,500					16,500	
総利益							15,145					
純利益							5,688				5,688	
資本金(現在)									28,692			28,692
合計	128,437	128,437			113,164	113,164	15,145	15,145	41,068	41,068	45,661	45,661

(吉田良三『最新式近世簿記精義』(1914,380))

<sup>8</sup> 吉田(1932) p30-32 参照のこと。

<sup>9</sup> Working Sheet という表題を用いたものでは初期のものと思われる。なお、損益計算書を損益計算表としている。

[仕訳2] 1	(借) 商品買入勘定	5,100	
	(貸) 商品財産勘定	5,100	
2(a)	(借) 商品財産勘定	6,700	
	(貸) 商品買入勘定	6,700	

様である。

#### 4.3 中村茂男『商業簿記講義』(1925)

##### (1) 中村茂男の Work Sheet (精算表) の特徴

中村茂男が1925年に出版した『商業簿記講義』において、修正記入欄入りの Work Sheet (精算表) が示されており、これは [図表 10] で示すように現代の精算表の形式に近いものである。<sup>11</sup> ここで示されている Work Sheet (精算表) は、試算表、修正記入、損益表、貸借対照表の8桁の精算表である。現在の精算表と同様に、修正記入欄には借方欄、貸方欄があり、決算修正仕訳を記入して、貸借合計で検証する形式となっている。また、損益表、貸借対照表のそれぞれで純利益が計算されるため、純利益が一致する形式も現代の精算表と同様のしくみである。さらに、損益表(損益計算書)と貸借対照表の配列も現代の精算表と同様である。

##### (2) Work Sheet (精算表) における商品売買益の計算

商品売買の処理について、繰越商品勘定、仕入勘定、売上勘定を用いた三分法で処理している。この精算表に関する決算整理仕訳は、[図表 11] の仕訳帳に示されているとおりである。

まさに、現代の日本における決算整理仕訳と同じ処理法である。私の調査の中では、(仕入/繰越商品)、(繰越商品/仕入)といった俗にたすきがけといった決算整理仕訳を転記する形での精算表の修正記入欄を示したのは、中村茂男『商業簿記講義』(1925)が日本で最初の簿記書だと思われる。現在にもつながる売上原価を計算するための決算整理仕訳である。(仕入/繰越商

#### [現代の売上原価算出のイメージ]

商品在高(当初) 5,100	売上原価 14,900	売上高 19,500
仕入高 16,500	商品在高(期末) 6,700	
売上総利益 4,600		(著者作成)

これは、現代の(仕入/繰越商品)、(繰越商品/仕入)と同様の三分法の決算整理仕訳である。現代の精算表では、この[仕訳2]にならって、修正記入するところであるが、Working Sheetの修正記入欄には、商品財産の行で借方と貸方に同じ金額¥6,700が記入され、あたかも[仕訳1]の仕訳を行っているような記入となっている。

決算整理仕訳においては、上記の[仕訳2]のような仕訳を行い、総勘定元帳に転記しているが、Working Sheet上では[仕訳1]のような考え方で簡便的に記入が行われていたと考えられる。つまり、決算整理仕訳にならって Working Sheet の修正記入欄が記入されていたわけではないということである。

Working Sheet上の損益計算表をみると、商品財産勘定¥5,100、商品買入勘定¥16,500、商品売上勘定¥19,500が転記される形となっている。つまり、商品財産(期首商品)¥5,100に当期の商品買入(仕入高)¥16,500を加えて、商品売上勘定¥19,500と商品財産(期末商品)¥6,700を差し引いて、(売上)総利益¥4,600が算出されている。ただし、(売上)総利益¥4,600の金額は個別には表示されないのは現代の精算表でも同

[図表 9] 上野道輔『簿記原理』(1922)の Working Sheet

元帳勘定	試算表		修正記入		貸借対照表		損益計算表	
	借方	貸方	借方	貸方	借方	貸方	借方	貸方
1 現金勘定		1250				1,250		
2 受取手形勘定		2490				2490		
3 受取勘定勘定		3000				3600		
4 繰上準備金勘定				(b) 72		72		
5 商品財産勘定	5100		(a) 6700	(a) 6700	6700		5100	6700
6 運搬具勘定		560				560		
7 同減修正勘定				(f) 56		56		
8 仕器勘定		450				450		
9 同減修正勘定				(g) 45		45		
10 支拂手形勘定		1000				1000		
11 支拂勘定勘定		1600				1600		
12 資本勘定		10000				10000		
13 商品売上勘定		19500						19500
14 繰上商品勘定	460						460	
15 商品買入勘定	16500						16500	
16 戻上商品勘定		1500						1500
17 仕入運賃勘定		280					280	
18 販賣運賃勘定		440					440	
19 販賣部俸給勘定		1100					1100	
20 保険料勘定		60	(b) 20	(b) 20	20		40	
21 一般俸給勘定		680	(d) 30	(d) 30		30	710	
22 燈火暖房費勘定		40					40	
23 消耗品勘定		140	(c) 30	(c) 30	30		110	
24 諸費用勘定		500	(e) 50	(e) 50			500	
25 利子割引料勘定			(h) 10	(h) 10	10			60
26 貸倒損失勘定			(i) 56				72	
27 減価償却費勘定			(j) 45				101	
28 純利益					15110	12803	25453	27760
	33650	33650	6963	6963	15110	2307	27760	27760

(上野道輔『簿記原理』(1922,109))

<sup>10</sup> 上野 (1922,101) 参照のこと

<sup>11</sup> Work Sheet という表題を用いたものでは初期のものと思われる。

【図表 10】 中村茂男『商業簿記講義』（1925）の Work Sheet

勘定科目		試算表		修正記入		損益表		貸借対照表	
		借方	貸方	借方	貸方	借方	貸方	借方	貸方
資本	金物	2,000	43,000					5,000	49,000
貸付	器具	5,000						1,000	
現預金	金	1,000						1,139	
受取	預手	18,640	17,500	(-)	1			24,255	
得意	先	50,150	27,805					4,000	
		50,000	1,000					4,500	
		6,369	2,000						
有価証券		5,700	1,000	(-) 50				4,600	
繰越商品(期首)		2,000		(-) 2,000					
仕入	金形		1,000	(-) 4,500				4,500	
仕入	手形	2,000	4,000						1,000
仕入	先	5,500	7,000						2,000
仕入	上		9,500						1,500
仕入	品	500				500	9,500		
仕入	品	9,500		(-) 2,000	(-) 4,500	7,000			
仕入	品		4.2						
仕入	品	250		(-) 20	(-) 20		450		50
仕入	品	120		(-) 40	(-) 40			40	50
仕入	品	50		(-) 1	(-) 5				5
仕入	品	200				200			
仕入	品	100						20	
仕入	品	645				650	545		
仕入	品	600		(-) 80					
仕入	品			(-) 1		1			
仕入	品			(-) 500		500			500
仕入	品			(-) 200	(-) 300	300			00
仕入	品			(-) 50		50			
仕入	品			(-) 20	(-) 20		20		2
純利益						779			779
		117,255	117,255	7,500	7,500	10,245	10,245	45,245	49,245

(中村茂男『商業簿記講義』（1925, 322-323))

【図表 11】 中村茂男『商業簿記講義』（1925）の仕訳帳

日附		摘要	元丁	借方	貸方
6	30	(整理記入ノ仕訳記帳) 繰越商品ノ整理 (仕入)	15	2,000-	
		(繰越商品)	9		2,000-
		前期末残高ヲ仕入勘定へ振替 (繰越商品)	レ	4,500-	
		(仕入)	15		4,500-
		期末残高ヲ仕入勘定へ記入			

(中村茂男『商業簿記講義』（1925,315))

品), (繰越商品/仕入) といった仕訳と修正記入欄への記入法は, その後日本の簿記教育で標準となって広がっていくことになったと思われる。

仕入		売上	
商品(期首)	2,000	売上原価	7,000
仕入	9,500	商品(期末)	4,500
		売上総利益	2,950
		売上高	9,950

(著者作成)

#### 4.4 太田哲三『商業簿記』（1930）

##### (1) 太田哲三の決算表（精算表）の特徴

太田哲三が1930年に出版した『商業簿記』において, [図表 12] のような修正記入欄入りの決算表（精算表）が示されており, これは現代の精算表の形式に近いものである。ここで示されている決算表（精算表）は, 試算表, 整理記入, 貸借対照表, 損益計算書の8桁の計算表である。現代の精算表と同様に, 整理記入欄に借方欄, 貸方欄があり, 決算整理仕訳を記入して, 貸

借合計で検証する形式となっている。また, 貸借対照表, 損益計算書のそれぞれで純利益が計算されるため, 純利益が一致するといった現代の精算表と同様のしくみとなっている。ただし, 損益計算書よりも貸借対照表が先(左側)といった配置の順番が現代の精算表とは異なるのは, 上野道輔『簿記原理』(1922)のWorking Sheetと同様である。

##### ②決算表（精算表）における商品売買益の計算

商品売買の処理について, 繰越商品勘定, 仕入勘定, 売上勘定で処理しているが, 決算表（精算表）の記入においては現代の三分法とは異なる方式を用いている。仕訳帳においては, 正規の決算整理仕訳を行いながら, 決算表の整理記入の際には, 期首商品棚卸高を繰越商品勘定から仕入勘定に振り替える仕訳を省略していると考えられる。この考え方で仕訳を示すと以下の通りとなる。

[図表 12] 太田哲三『商業簿記』(1930)の決算表

科 目	試 算 表		整 理 記 入		貸 借 対 照 表		損 益 計 算 書	
	借 方	貸 方	借 方	貸 方	借 方	貸 方	借 方	貸 方
(1)現金当座預金	5,180.00				5,180.00			
(2)公債株券	27,000.00			1,500.00	25,500.00			
(3)賣掛金	9,800.00				9,800.00			
(4)貸倒準備金		570.00	80.00			490.00		
(5)繰越商品	5,600.00		3,500.00		3,500.00		5,600.00	
(6)営業用什器	2,600.00				2,600.00			
(7)同減價準備金		180.00		260.00		440.00		
(8)借入金		20,000.00				20,000.00		
(9)資本金	100.00	25,000.00				25,900.00		
(10)仕入勘定	25,000.00			3,500.00			21,500.00	
(11)売上勘定		33,100.00						33,100.00
(12)廣告料	2,050.00			1,300.00			1,000.00	
(13)給料	1,200.00						1,200.00	
(14)雑費	620.00		300.00				920.00	
(15)保険料	600.00			400.00			200.00	
(16)利息割引料	250.00	150.00	150.00	400.00			400.00	550.00
(17)減価消却費			260.00				260.00	
(18)貸倒金(戻入)				80.00				80.00
(19)評価損失			1,500.00				1,500.00	
(20)未収支勘定			400.00	(150.00)	400.00	450.00		
(21)未經過經費			(1,000.00)	(300.00)	1,400.00			
(純 益)						1,100.00	1,100.00	
	80,000.00	80,000.00	7,590.00	7,590.00	48,380.00	48,380.00	33,730.00	33,730.00

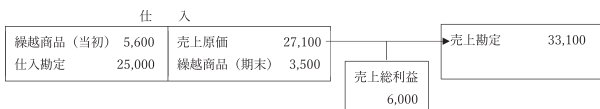
(太田哲三『商業簿記』(1930,286))

[仕訳 1] (借) 仕 入 5,600  
 (貸) 繰越商品 5,600… 省略  
 (借) 繰越商品 3,500  
 (貸) 仕 入 3,500… (1)

つまり決算表の整理記入上は、[仕訳 1]における期首商品¥5,600を繰越商品勘定から仕入勘定に振り替える仕訳を省略し、(1)の仕訳のみを整理記入欄に記入するのである。<sup>12</sup> 損益計算書には繰越商品¥5,600、仕入勘定¥21,500、売上勘定¥33,100が転記される形となっている。つまり、繰越商品¥5,600(期首)に仕入勘定の(¥25,000 - ¥3,500) ¥21,500を加えて算出された売上原価¥27,100と売上勘定¥33,100の差額で商品売買益(売上総利益) ¥6,000が計算されている。

元帳勘定	試 算 表		整 理 記 入		貸 借 対 照 表		損 益 計 算 書	
	借 方	貸 方	借 方	貸 方	借 方	貸 方	借 方	貸 方
5 繰越商品	5,600		3,500		3,500		5,600	
10 仕入勘定	25,000			3,500			21,500	
11 売上勘定		33,100						33,100

[現代の売上原価算出のイメージ]

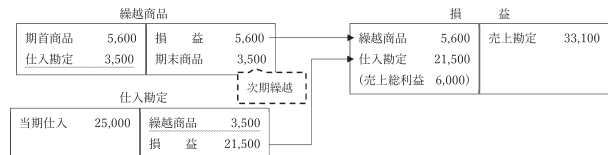


太田哲三『商業簿記』(1930)における売上原価算出方法は、現代の仕入勘定で売上原価を計算する方法とは異なり、期末商品を仕入勘定から控除する方式である

ため、損益計算書に移記される¥21,500には特に意味はなく、繰越商品勘定の¥5,600(期首商品)を加算することで、売上原価が計算されるのである。

ただし、売上原価¥27,100と商品売買益(売上総利益) ¥6,000の金額は個別には表示されないのは現代の精算表でも同様である。

[太田哲三『商業簿記』での処理]



#### 4.5 吉田良三『商業簿記提要』(1934)

##### (1) 吉田良三の精算表の特徴

吉田良三が1934年に出版した『商業簿記提要』では、[図表 13]のような修正記入欄のある精算表が示されており、現代の精算表の形式に近い形式である。ここで示されている精算表は、試算表、修正記入、損益計算書、貸借対照表の8桁の計算表である。修正記入欄には借方欄、貸方欄があり、決算修正仕訳を記入して、貸借合計で検証する形式となっている。また、損益計算書、貸借対照表のそれぞれで純利益が計算され、純利益が一致するといった現代の精算表と同様のしくみとなっている。また、損益計算書と貸借対照表の配列も現代

<sup>12</sup> 仕訳帳における決算整理仕訳においては、省略しない正規の仕訳が行われる。あくまで決算表の修正記入上の略式の記入である。

[図表 13] 吉田良三『商業簿記提要』(1934)の精算表

元丁	勘定科目	試算表		修正記入		損益計算書		貸借対照表	
		借方	貸方	借方	貸方	借方	貸方	借方	貸方
1	現金	5,533 00	5,469 00					64 00	
2	当座預金	8,074 00	5,441 40					2,632 60	
3	元木商店	1,010 00	576 00					434 00	
4	村川商店	1,032 50	1,032 50						
5	商品	5,820 00	4,541 00	(A) 1,572 00	1,572 00		293 00	1,572 00	
6	貸付金	1,000 00		(A)				1,000 00	
7	什器	400 00		380 00	20 00	20 00		380 00	
8	井上商會	3,800 00	3,800 00						
9	中野商會	1,020 00	2,020 00						1,000 00
10	資本金		5,000 00						5,000 00
11	家賃	80 00				80 00			
12	倉敷料	35 40				35 40			
13	雑費	75 00				75 00			
						82 60			82 60
		27,879 90	27,879 90	1,952 00	1,952 00	293 00	293 00	6,082 60	6,082 60

(吉田良三『商業簿記提要』(1934.99))

の精算表と同様である。なお、同書において、吉田は棚卸表欄を配置した精算表<sup>13</sup>も示している。

(2) 精算表における商品売買益の計算

商品売買の処理については、商品勘定を用いた総記法で処理している。この精算表の修正記入欄では、次のような記入が行われている。

元帳勘定	試算表		修正記入		損益計算書		貸借対照表	
	借方	貸方	借方	貸方	借方	貸方	借方	貸方
5 商品	5,820	4,541	1,572	1,572		293	1,572	

この修正記入が修正仕訳にならっているとすれば次のような仕訳をしていると考えられる。

[仕訳 1] (借) 商品 1,572  
(貸) 商品 1,572

しかし、吉田良三『商業簿記提要』(1934)のP84の仕訳帳では、修正仕訳が次のように示されている。

[仕訳 2] (借) 商品 293  
(貸) 損益 (または商品売買益) 293<sup>14</sup>

これは、総記法における商品売買益を損益勘定に振り替える仕訳である。現代の精算表では、この [仕訳 2] にならって、修正記入するところであるが、精算表上では、商品の行で借方と貸方に同じ¥1,572という金額が記入され、あたかも [仕訳 1] の仕訳を行っているよ

うな記入となっている。

しかし、決算整理仕訳においては、[仕訳 2] のような仕訳を行い、総勘定元帳の商品勘定に転記しているが、この精算表上では [図表 13] のように簡便的に記入が行われていたと考えられる。<sup>15</sup>

この設例が商品勘定を用いた総記法で処理している場合の商品勘定は以下のとおりである。

仕入(原価)	5,820	商品売上(売価)	4,541
売上総利益	293	商品(期末)	1,572

商品勘定の借方の¥5,820は仕入れた商品の原価であり、これから貸方の商品売上高(売価)¥4,541と貸方の期末商品棚卸高¥1,572を差し引くことによって、商品売買益¥293が算出される。精算表では、この計算プロセスを商品勘定の行で計算し、算出された商品売買益(売上総利益)¥293を損益計算書の貸方に転記している。

一方、修正記入欄の借方の¥1,572は期末商品棚卸高として貸借対照表の借方に転記されている。

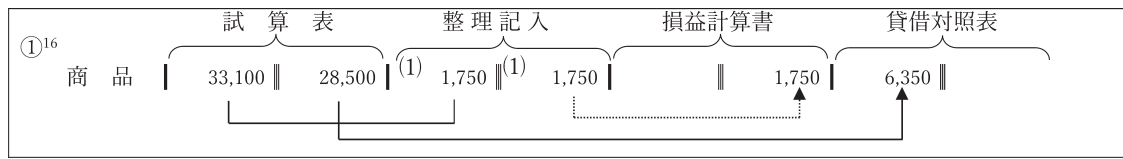
前述の上野道輔『簿記原理』の例と同様に、当時は必ずしも、決算整理仕訳にならって精算表の修正記入欄が記入されていたわけではなく、その後、決算整理仕訳にならって精算表の整理記入欄を記入するという

<sup>13</sup> 吉田 (1934) の P104 には、商品勘定を用いた総記法での処理を棚卸表欄のある精算表で示している。

<sup>14</sup> 吉田 (1934) の P81 には、(借) 商品 ×× (貸) 損益 (または商品売買益) ×× という形で仕訳を示している。

<sup>15</sup> 『簿記教科書 - 復刻版 -』(製作者: 近藤昌孝) 昭和 21 年当時に新潟商業学校で用いられていた簿記の教科書の復刻版によれば、P62 に『決算に際して…総勘定元帳に上記決算手続きを施さなくとも試算表並びに棚卸表から直接決算表の数字を算出する工夫が行われるのである』とある。このことから決算整理仕訳などの正式な決算手続きを経ないで決算表(精算表)の金額を簡便的に記入することが行われていたことがうかがえる。

[図表 14] 総記法での処理法①



(太神和義『商業簿記概説』(1940.95-96))

現代的な手続きに発展していったと考えられる。

## 5 精算表における様々な売買損益計算法

精算表の整理記入欄に、貸借とも同じ金額を記載する方法について、太神和義<sup>17</sup>は『商業簿記概説』(1940)の中で、「八桁精算表の作り方」の説明を次のようにしている。

### 5.1 様々な精算表の作り方

#### (1) 総記法での処理法①(整理記入欄の貸借に商品売買益の金額を記入する方法)

「整理記入欄の記入法につきては別法がある。即ち整理記入上の勘定を特に設けることを省略し、便宜一勘定の借方、貸方に同一の金額を記入し、略したる勘定の作用を兼ねしめるのである。…

①商品勘定について、商品売買益勘定を設けず、計算したる売買益を商品勘定の借方貸方に同額を以て記入し、之より運算して、損益計算書と貸借対照表に移記するのである。図解例示すれば次の通りである」(太神, 1940.95)。

つまり、商品売買の処理について、総記法を用いて商品勘定のみで処理する場合、商品勘定の借方に商品売買益が計上されるため、通常は決算整理仕訳として次のような仕訳を行う。

[仕訳 1] (借) 商品 1,750  
(貸) 商品売買益 1,750

商品			
仕入(原価)	33,100	商品売上(売価)	28,500
売上総利益	1,750	商品(期末)	6,350

しかし、このような正規の処理をすると、精算表において、商品勘定とともに、商品売買益勘定の行が必要となる。そこで、商品売買益勘定を省略して、商品勘定の行のみで処理しようとした場合に、次のように整理記入欄の商品勘定の貸借に商品売買益の金額 ¥1,750 を記入するのである。この精算表の整理記入を仕訳にしてみると、次のようになる。

[仕訳 2] (借) 商品 1,750  
(貸) 商品 1,750

実際に仕訳帳では [仕訳 1] のような仕訳を行いつつ、精算表の整理記入欄の記入にあたっては、便宜的処理として [仕訳 2] にならって、[図表 14] のような記入を行っているのである。

#### (2) 総記法での処理法②(整理記入欄の貸借に棚卸高の金額を記入する方法)

さらに「商品勘定には棚卸高を整理記入欄の借方、貸方に記入する方法がある。この際整理記入欄の借方金額はそのまゝ、資産の現在高として貸借対照表に移し、貸方金額は試算表の数字と加減して結果を求め、之を売買損益として損益計算書に移すのである。(この方法は簡便なるを以て比較的廣く行はれる。) 図解例示すれば次の通りである」(太神, 1940.95)。

つまり、この例も前述の(1)と同様に商品売買の処理について、総記法を用いて商品勘定のみで処理する場合、商品勘定の借方に商品売買益が計上されるため、通常は決算整理仕訳として次のような仕訳を行う。

[仕訳 1] (借) 商品 1,750  
(貸) 商品売買益 1,750

しかし、このような正規の処理をすると、精算表において、商品勘定とともに、商品売買益勘定の一行が必要となる。そこで、商品売買益勘定を省略して、商品勘定の行のみで処理するために、次のように整理記入欄の商品勘定の貸借に期末商品棚卸高の金額 ¥6,350 を記入するのである。この精算表の整理記入を仕訳にしてみると、次のようになる。

[仕訳 2] (借) 商品 6,350  
(貸) 商品 6,350

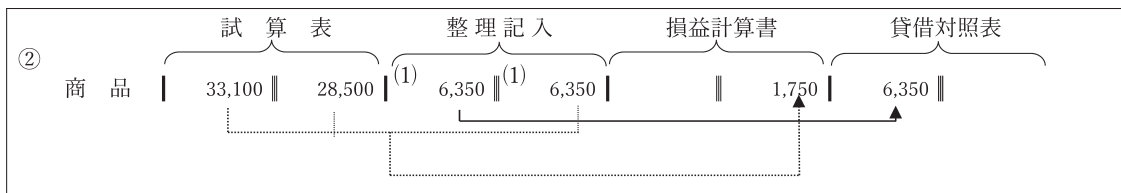
実際にはこのような仕訳は行わず、あくまでも精算表の上での便宜的処理として [図表 15] のような処理を行っている。

このように、大正から昭和の初期にかけて決算整理仕訳とは別に、精算表作成上は簡便法として、商品勘定の借方、貸方に同一の金額を記入し、略した処理を

<sup>16</sup> ①、②は便宜上著者が付したものである。

<sup>17</sup> 太神和義は当時大分高等商業学校(現在の太神大学)の教授であった。

[図表 15] 総記法での処理法②



(太神和義『商業簿記概説』(1940,95-96))

[図表 16] 三分法での処理法① (第一法に相当する方法)<sup>18</sup>

第一法に相当する方法		精 算 表							
科 目	試 算 表		整 理 記 入		損 益 計 算 書		貸 借 対 照 表		
	借方	貸方	借方	貸方	借方	貸方	借方	貸方	
繰越商品	12,000		13,000	13,000	12,000	13,000	13,000		
仕 入	120,000	5,000			115,000				
売 上	3,000	120,000				117,000			

(太神和義『商業簿記概説』(1940,178))

していたことがわかる。なお、「総記法での処理法①」の例は、前述の上野道輔『簿記原理』(1922)の Working Sheet と同じ処理法であり、「総記法での処理法②」の例は [図表 13] で示す吉田良三『商業簿記提要』(1934)の精算表と同じ処理法である。

さらに、太神 (1940) においては、精算表の三分法での様々な処理法についても次のように説明している。

(3) 三分法での処理法① (第一法：繰越商品の貸借に期末棚卸高を記入する方法)

「整理記入として期末棚卸高を繰越商品勘定の借方・貸方に記入したる上、繰越商品勘定にありては借方残(前期繰越高)をそのまま、損益計算書の借方へ、貸方整理記入額(期末棚卸高)をそのまま、損益計算書の貸方へ、売上勘定にありては残高を損益計算書の貸方に移すのである。かくして損益計算書には売買損益勘定の如く売買損益計算の各項目が集めらるゝから、自然売買損益を示すべく、又貸借対照表は商品の繰越高を示すのである」(太神,1940,178)。

この説例では、商品売買の処理について、繰越商品勘定、仕入勘定、売上勘定で処理している。商品売買の手続きを現代の三分法の考え方で決算整理仕訳を行うと以下の通りとなる。

[仕訳 1] (借) 仕 入	12,000
(貸) 繰越商品	12,000
(借) 繰越商品	13,000
(貸) 仕 入	13,000

仕訳帳において [仕訳 1] のような決算整理仕訳をしながらも、精算表上では簡便的方法として、[図表 16] のように整理記入欄の商品勘定の貸借に期末商品棚卸高 ¥13,000 を記入している。この精算表の整理記入を仕訳にしてみると、次のようになる。

[仕訳 2] (借) 繰越商品	13,000
(貸) 繰越商品	13,000

実際には [仕訳 2] のような仕訳は行わず、あくまでも精算表の上での便宜的処理として [図表 16] のような処理を行っているのである。この方法は、貸借の双方に期末商品棚卸高の金額を記入することから、前述の「総記法での処理法②」の考え方に近い処理法と思われる。

(4) 三分法での処理法② (第二法：現代と同様の方法)

[図表 17] の方法では、仕入勘定で売上原価 ¥114,000 を計算して、その金額と純売上高 ¥117,000 を損益計算書に移記して、商品売買益(売上総利益) ¥3,000 を計上しており、仕入勘定で売上原価を計上する現代の標準的な方式と同様の方法である。

つまり、商品売買の処理について、繰越商品勘定、仕入勘定、売上勘定を用いて、決算整理仕訳では現代の三分法の考え方で仕訳を行うとともに、精算表の整理記入においても、決算整理仕訳を転記する形で記入している。決算整理仕訳と精算表の整理記入欄に齟齬がない現代の手法である。しかしながら、この現代的な手法は当時第二法として紹介されており、精算表作

<sup>18</sup>太神 (1940) p178 では、第一法に相当する方法として、売買勘定欄を設けた 10 桁精算表の事例も紹介されているがここでは省略する。

[図表 17] 三分法での処理法②（第二法に相当する方法）

第二法に相当する方法								
精 算 表								
科 目	試 算 表		整 理 記 入		損 益 計 算 書		貸 借 対 照 表	
	借方	貸方	借方	貸方	借方	貸方	借方	貸方
繰越商品	12,000		(2) 13,000	(1) 12,000			13,000	
仕 入	120,000	5,000	(1) 12,000	(2) 13,000	114,000			
売 上	3,000	120,000				117,000		

(太神和義『商業簿記概説』(1940,178))

[図表 18] 三分法での処理法③（現代の方法の簡略法）

第二法に相当する方法（簡略法）								
精 算 表								
科 目	試 算 表		整 理 記 入		損 益 計 算 書		貸 借 対 照 表	
	借方	貸方	借方	貸方	借方	貸方	借方	貸方
繰越商品	12,000		(1) 13,000		12,000		13,000	
仕 入	120,000	5,000		(1) 13,000	102,000			
売 上	3,000	120,000				117,000		

(太神和義『商業簿記概説』(1940,178))

成に関して、様々な便宜的方法が広く用いられていたことが伺える。

[仕訳1] (借) 仕 入 12,000  
 (貸) 繰越商品 12,000 … (1)  
 (借) 繰越商品 13,000  
 (貸) 仕 入 13,000 … (2)

#### (5) 三分法での処理法③（第二法の簡略法）

さらに、前述の三分法での処理法②（第二法に相当する方法）の簡略法として [図表 18] ような例示がされている。

「之は前期繰越高を繰越商品勘定より仕入勘定へ振り返る仕訳を省略するのであるが、その結果前期繰越高はそのまま損益計算書の借方に移され、こゝに於いて仕入勘定の数字と加算さるゝことゝなる譯である。」(太神,1940,178)。

つまり、商品売買の手続きを現代の三分法の考え方で決算整理仕訳を行っているが、精算表の整理記入において、期首商品棚卸高を繰越商品勘定から仕入勘定に振り替える仕訳を省略しているのである。この考え方で仕訳を示すと以下の通りとなる。

[仕訳1] (借) 仕 入 12,000  
 (貸) 繰越商品 12,000 … 省略  
 (借) 繰越商品 13,000  
 (貸) 仕 入 13,000 … (1)

ただし、これはあくまでも精算表作成上の簡略法であり、仕訳帳においてはこの決算整理仕訳は行われて

いると思われる。

この三分法での処理法③（第二法の簡略法）の例は、[図表 12] で示す太田哲三『商業簿記』(1930 [昭和 5] 年)の精算表の処理法と同様である。太神和義『商業簿記概説』(1940 [昭和 15] 年)においてもこの処理法が説明されていることを考えると、戦前、昭和 15 年ごろまでは、三分法においても、決算整理仕訳とは別に、精算表作成上は様々な記入法が教育されていた状況が伺える。<sup>19</sup>

#### (6) 三分法での処理法④（第三法：売上勘定で商品売買益を計算する方法）

[図表 19] は売上勘定で商品売買益を計算させる方法である。計算された商品売買益 ¥3,000 は損益計算書に移記され、期末商品棚卸高は貸借対照表に移記される。

つまり、商品売買の処理について、繰越商品勘定、仕入勘定、売上勘定で処理しているが、仕入勘定で算出した売上原価を売上勘定に振り替え、最終的に売上勘定で商品売買益（売上総利益）を算出する方法である。

この処理法で仕訳を示すと以下の通りとなる。

[仕訳1] (借) 仕 入 12,000  
 (貸) 繰越商品 12,000 … (1)  
 (借) 繰越商品 13,000  
 (貸) 仕 入 13,000 … (2)  
 (借) 売 上 114,000  
 (貸) 仕 入 114,000 … (3)

ただし、この売上勘定で売上総利益を計算する方法

<sup>19</sup> 太神 (1940) の出版は、昭和 15 年であり、戦前の簿記教育の状況を伺い知ることができる。

[図表 19] 三分法での処理法④（第三法に相当する方法）

第三法に相当する方法								
精 算 表								
科 目	試 算 表		整 理 記 入		損 益 計 算 書		貸 借 対 照 表	
	借方	貸方	借方	貸方	借方	貸方	借方	貸方
繰越商品	12,000		(2) 13,000	(1) 12,000			13,000	
仕入	120,000	5,000	(1) 12,000	(2) 13,000				
売上	3,000	120,000	(3) 114,000	(3) 114,000		3,000		

(太神和義『商業簿記概説』(1940,178))

[図表 20] 日本における精算表の変遷

【棚卸欄のある精算表】	特徴	表題
<ul style="list-style-type: none"> <li>・福澤諭吉『帳合之法』(1873)</li> <li>・山田十畝『人民必携簿記提要』(1880)</li> <li>・竹田等『商用簿記学』(1882)</li> <li>・竹村真次『帳簿改良法_商家案内』(1892)</li> <li>・佐野善作『商業簿記教科書』(1897)</li> <li>・竹田等『商用簿記学修正』(1901)</li> <li>・吉田良三『最新商業簿記学』(1904)</li> </ul>	精算表(平均表)を初めて紹介 横型, アラビア数字の一覧表型 縦型, 漢数字の一覧表, 貸借配置型・一覧表型 縦型, 漢数字の一覧表, 一覧表型 横型, アラビア数字の貸借配置型 横型, アラビア数字の貸借配置型 一覧表型の精算表だが, 棚卸表の欄がある形式	平均表 差引残高一覧表 精算表 精算表 精算表 精算表
【整理記入欄のある精算表】	特徴	表題
<ul style="list-style-type: none"> <li>・吉田良三『最新式近世簿記精義』(1914)</li> <li>・上野道輔『簿記原理』(1922)</li> <li>・宝文館『商業簿記講義最近三箇年全国官公立高等商業学校入学試験簿記問題詳解』(1923)</li> <li>・中村茂男『商業簿記講義』(1925)</li> <li>・太田哲三『商業簿記』(1930)</li> <li>・吉田良三『商業簿記提要』(1936)</li> <li>・吉田良三『改訂中等簿記教科書』(1938)</li> </ul>	整理表欄を含む12桁精算表だが未完成 整理記入を含んだ日本初の8桁精算表 整理記入を含んだ10桁精算表 整理記入を含んだ8桁精算表 整理記入を含んだ8桁精算表 整理記入を用いた8桁精算表 整理記入を用いた8桁精算表	決算表 Working Sheet 決算一覧表 Work Sheet 決算表 精算表 精算表

は、戦前の簿記教育においてはよく紹介された方法であり、仕訳帳においてもこの決算整理仕訳は行われていると思われる。

## 5.2 日本における標準的な精算表の作り方

このように、太神和義が昭和15(1940)年に出版した『商業簿記概説』を考察することによって、以下の通り、大正から昭和にかけて、決算整理仕訳とは別に、精算表の作成上は簡便法として、様々な記入法が教育されていたことが分かった。

「総記法での処理法②」の例は、吉田良三『商業簿記提要』(1934)の精算表の処理法と同様である。

「三分法での処理法①」の例は、上野道輔『簿記原理』(1922)のWorking Sheetと同じ処理法である。

「三分法での処理法②」の例は、中村茂男『商業簿記講義』(1925)のWork Sheetと同じ処理法である。

「三分法での処理法③」の例は、太田哲三『商業簿記』(1930)の精算表の処理法と同様である。

その後、商品売上の処理法は、「三分法での処理法②」の仕入勘定で売上原価を計算する手法に取れんされ、

現在、我が国ではどの簿記教科書においても、この方法によって簿記教育がなされることになる。今日の仕入勘定で売上原価を計算するという「三分法での処理法②」が最初から標準だった訳ではなく、この処理法が時間をかけて、日本の中で標準的な方法として広まってきたことを知っておく必要があるだろう。

## 6 精算表の誕生

(ブライアント&ストラットンの簿記書の系譜)

### 6.1 精算表の萌芽

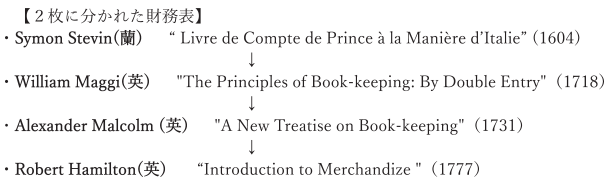
(オランダからイギリスに継承された精算表の萌芽)

17世紀の初めに、元帳の締め切りに先立って、精算表の作成を最初に示したのがオランダのシーマン・ステフィン(Symon Stevin)であった。しかし、ステフィンの精算表は、今日の多桁式で一覧表型の精算表とは異なり、資産・負債・資本と費用・収益が別々に「状態表」、「損益表」として勘定形式で作成されたものであった。これは一見、精算表ではなく貸借対照表と損益計算書を連想させる。しかし、彼の説く2枚の表は今日の財務諸表ではなく、機能的には決算に先立ちそ

の运算のために作成された精算表だったと言われる。

このステフィンの2つの財務表は、18世紀のイギリスのマギー (William Maggi) "The Principles of Book-keeping: By Double Entry" (1718) やマルコム (Alexander Malcolm) "A New Treatise on Book-keeping" (1731) に継承され、ハミルトン (Robert Hamilton) "Introduction to Merchandize" では、その具体的な例示が掲載されている。つまり、イギリスでの精算表もまた、ステフィンと同様に資産・負債・資本と費用・収益が2枚にわかれた勘定形式の財務表であった。<sup>20</sup>

【図表 21】 オランダ・イギリスでの精算表の系譜



## 6.2 米国での精算表の発展

今日のような一覧表型の精算表の登場は19世紀の米国で登場する。多桁式一覧表型の精算表の萌芽については、様々な説があるが、その初期の精算表としては

ニューヨークで出版されたゴダード (Thomas Goddard) の『商人と会計人 (The Merchant or Practical Accountant)』(1821) のバランスシートがあげられる。<sup>21</sup>

彼が示したのは、今日の精算表とほぼ同様の多桁式一覧表型の精算表であった。このころの多桁式精算表はバランスシートと呼ばれていたが、ゴダードのバランスシートは、[図表 22] に示すように合計試算表、残高試算表、損益勘定、資本勘定、資産負債状態表からなる10桁精算表であった。<sup>22</sup>

なお、ゴダードはこの現代の精算表と同形式の一覧表を「バランス・シート」(Balance sheet)と呼んでいるが、19世紀には、特に米国においては「ワーキング・シート」(Working sheet) や「ワーク・シート」(Work sheet)ではなく、「バランス・シート」と呼ばれていたようである。<sup>23</sup>それは「この表は形式的には貸借平均する決算表であるということの外に、内容的には当初の簿記の計算では、財産計算、いいかえると残高計算が最も重要な計算であった、この伝統的な意識が強く支配していたため」(小島,1961,221)といわれている。<sup>24</sup>

その後、後述するポール・ヨウツェフ・エスクーレ (Paul-Joseph Esquerre) の "The Applied Theory of

【図表 22】 ゴダード『商人と会計人』(1834) のバランスシート (精算表)

Alexander Hamilton's BALANCE SHEET Taken 30th June, 1818		Face of Ledger		Face of Ledger		Profit & Loss Account		Stock Account		State of the Concern preparatory to transferring	
		Debit	Credit	Debit	Credit	Debit	Credit	Debit	Credit	Debit	Credit
Folio	Stock	5,325.55	13,391.20		8,065.65				8,065.65		
2	Cash	159.20		159.20						159.20	
2	Merchandise	96,132.25	80,270.25	15,862.00						15,862.00	
3	U.S.Branch Bank	23,673.28	13,737.55	9,935.73						9,935.73	
3	Bills Receivable	65,392.88	44,458.88	20,934.00						20,934.00	
4	Bills Payable	36,757.80	74,730.30		37,972.50						37,972.50
4	Ivan Hull	10,172.75	4,695.25	5,477.50						5,477.50	
5	Charla Gracie	19,134.25	18,246.50	887.75						887.75	
5	Charges	683.00		683.00		683.00					
5	Adam Smith	14,626.00	6,423.50	8,202.50						8,202.50	
5	Fuher Ames	1,961.00	5,196.00		3,235.00						3,235.00
6	Interest	12.75	140.50		127.75		127.75				
6	House expenses	542.60		542.60		542.60					
6	Profit & Loss Account		13,283.38		13,283.38		13,283.38				
		274,573.31	274,573.31	62,684.28	62,684.28						
Whole amount of Erpenses in busines...						1,225.60					
Whole amount of Gains in busines...							13,411.13				
Balance of Profit & Loss account being my net gains in business, which I transfer to the Account of Stock...						12,185.53			12,185.53		
						13,411.13	13,411.13				
Making my net worth, this day...							20,251.18				
						20,251.18	20,251.18				
Whole amount of Debts due me.									61,458.68		
Whole amount of Debts I see...										41,207.50	
Making my net Capital, this...										20,251.18	
sum, as per Stock Account...									61,458.68	61,458.68	

Save Errors, New York, 30th: June, 1818.

*Alexander Hamilton*

(Thomas Goddard : "The Merchant of Practical Accountant" (1834,47) より著者作成)

<sup>20</sup> 渡邊 (2014) p121 参照のこと  
<sup>21</sup> 渡邊 (1993) p41 参照のこと  
<sup>22</sup> 渡邊 (2014) p140 参照のこと  
<sup>23</sup> 渡邊 (1993) p59 参照のこと  
<sup>24</sup> 小島 (1961) P221 参照のこと

【図表 23】 コルト 『複式簿記の科学』 (1880) のバランスシート (精算表)

Balance sheet								
Name of Account	Face of Ledger		Profit & Loss Account		Stock Account		Balance Account or State of the Concern preparatory to transferring or opening new books	
	Dr.Bal.	Cr.Bal.	Dr	Cr	Dr	Cr	Dr	Cr

(J.P.Colt: 『The Science of Double Entry Bookkeeping』, Cincinnati, 2<sup>nd</sup>, ed.1838 より 著者作成)

【図表 24】 ブライアント&ストラットン “Common school Book-Keeping” (1861) のバランスシート (精算表)

S. S. PACKARD'S BALANCE SHEET.*										
Taken February 28, 1861.		Trial Balance.		Inven- tory.	Representative.		Stock.		Real.	
Dr.	Cr.	Dr.	Cr.		Losses.	Gains.	Dr.	Cr.	Resources.	Liabilities.
Stock . . . . .	15500	17070					1570			
Bills Receivable . . . . .	4473							4473		
Peter Cooper . . . . .	1794							1794		
Cash . . . . .	11493 50	11145 50						348		
Merchandise . . . . .	2945 50	1178 55	2500		733 05			2500		
Bills Payable . . . . .	500	750							250	
Smith & Sons . . . . .	3000	5000							3000	
George Davis . . . . .	803 50	750						53 50		
James Hathaway . . . . .	4095 80	8250						60	4154 20	
S. S. Randall . . . . .	60									
Henry Van Dyck . . . . .	125 25							135 25		
L. Fairbanks . . . . .	29							29		
Expense . . . . .	200			200					32 40	
E. F. Hill . . . . .	32 40								82	
B. F. Carpenter . . . . .	82									
	45144 05	45144 05								
To Stock—Net Gain . . . . .					533 05			533 05		
					733 05	733 05				
					To Balance—Net Capital . . . . .		2103 05			2103 05
							2103 05	2103 05	9507 25	9507 25

(Bryant and Stratton “Common school Book-Keeping” (1861.141))

Accounts” (1914) では、[図表 27] で示すようにワーキング・バランス・シート (Working Balance Sheet) という名前となっている。また、ヘンティ・ライオンズ (Henty M.Lyons) の “Lyons' Bookkeeping and Accounting” (1920) では、ワーク・シート (Work sheet), ペイトン・スチーブソン (Paton・Stevenson) の “Principles of Accounting” (1920) においてはワーキング・シート (Working sheet), そして、ペイトン (Paton) の “Accounting” (1924) では、ワーキング・シート (Working sheet) と呼んでおり、1920 年代以降、Work sheet, Working sheet という現代と同じ呼称が広まっていったようである。<sup>25</sup>

一覧表形式の精算表は初期にバランス・シートと呼ばれていたが、その後ワーキング・バランス・シートと呼ばれ、その後、ワーキング・シート、ワーキング・ペーパーへと変わってきたが、今日のワーキング・シート、ワーク・シートと呼ばれるようになったのは、20 世紀になってからのことのように見える。<sup>26</sup>

コルト (J.P.Colt) の簿記書 (1838) では、[図表 23] で示すようにバランスシート (精算表) が、さらに精

錬された形式となって、残高試算表、損益勘定及び資本金勘定と残高勘定とから成り立っていた。<sup>27</sup>

しかし、ゴダードやコルトのバランスシートには、まだ、棚卸表欄は設けられておらず、商品売買益の計算は表の枠外で計算されたものと思われる。

米国では、ゴダードやコルトのバランスシートをさらに発展させ、棚卸欄が導入された形式となっていく。ブライアント&ストラットン (Bryant and Stratton) の “Common school Book-Keeping” (1861) では、[図表 24] で示すように棚卸 (Inventory) 欄を設けたバランスシートが載せられており、わが国初の簿記翻訳書である『帳合之法』の「パッカルド氏専用の平均表」は、まさに、この “Common school Book-Keeping” のバランスシートの和訳ということになる。和訳である『帳合之法』では、縦型の一覧表となっているが、もちろん原本では、横書きであり、確かに現在の精算表につながる進んだ内容と形式になっていることがわかる。<sup>28</sup>

その後、1800 年代後半にさまざまな簿記書において棚卸表欄を設けた精算表が紹介されている。

ソール (George Soule) が 1881 年に出版した “The

<sup>25</sup> 渡邊 (1993) p59-p63 参照のこと

<sup>26</sup> 渡邊 (1993) p68-p69 参照のこと

<sup>27</sup> 小島 (1961) P220 参照のこと

<sup>28</sup> 小島 (1961) P221-222 参照のこと

[図表 25] ソール“*The New Science and Practice of Accounts*” (1881) のバランスシート (精算表)

BALANCE SHEET LEDGER A.											
LEDGER ACCOUNTS.				PROPERTY		PROFIT AND LOSS.		J. M. BUTCHEE.		BALANCE	
NAMES.		Dr.	Cr.	Unadv.	Dr.	Cr.	Dr.	Cr.	Resources	Liabilities	
J. M. Butchee	-	50.00	3000.00					2950.00			
Cash	-	5465.78	3420.00						2045.78		
Merchandise	-	4400.00	3785.00	975.00		360.00			975.00		
Bills Payable	-		1100.00							1100.00	
Bills Receivable	-	1585.00	525.00						1060.00		
A. J. Perkins	-		1000.00							1000.00	
A. Cunningham	-	605.00	500.00						195.00		
Expense	-	75.00			75.00						
Int. and Discount	-	0.22			9.22						
Germania Bank Stock	-	980.00	520.00	510.00		50.00			510.00		
Profit and Loss	-	15.00			15.00						
R. Lee	-	575.00							575.00		
		13850.00	13850.00	1485.00							
		J. M. Butchee's Net Gain			310.78			310.78			
					410.00	410.00					
					J. M. Butchee's Net Capital			3260.78		3260.78	
							3260.78	3260.78			
									5360.78	5360.78	

(George Soule “*The New Science and Practice of Accounts*” (1881,72))

*New Science and Practice of Accounts*”では、[図表 25] のような棚卸表 (Property) 欄を設けた精算表が示されている。このソールの棚卸表欄を配置した形式は、ブライアント&ストラットンの精算表と同様の内容となっている。彼の経営する Soule Business College では、この簿記書を教科書として用いて簿記教育が行われていたと思われる。

この状況を考えると 1880 年代の米国では棚卸欄を設けた精算表を用いて簿記教育がされていた様子が伺える。日本では 1874 年に『帳合之法 - 二編』が出版され、そこには棚卸欄を設けたバランスシート (精算表) が載せられていたことを考えると、当時日本では帳合之法によって、単に複式簿記が紹介されたというだけでなく、最先端の複式簿記の内容が教育されていたということになるのではないだろうか。<sup>29</sup> しかしながら、まだ決算整理事項を記入する 2 桁の整理記入欄は設けられておらず、その後の発展を待つことになる。

### 6.3 米国での精算表の発達

#### ～整理記入欄を備えた精算表～

19 世紀初期のゴダートやコルトの精算表には、まだ、

棚卸 (inventory) 欄や整理記入 (Adjustment) 欄はなかった。その後、19 世紀後半となって、ブライアント&ストラットンやソールなどの簿記書において棚卸欄が登場する。この棚卸 (inventory) 欄は商品売買益などを計算する決算修正の内容を処理する欄ではあるが、まだ、決算整理仕訳を転記する 2 桁の整理記入欄ではなかった。その後、それを発展させる形で整理記入欄を設けた精算表が登場することとなる。この先鞭をつけたのがエスクーレ (Esquerre) である。

#### (1) ポール・ヨウツェフ・エスクーレの精算表

ポール・ヨウツェフ・エスクーレ (Paul-Joseph Esquerre) の『会計の応用理論 (The Applied Theory of Accounts)』(1914) ではワーキング・バランス・シート (Working Balance Sheet) という名前で、現代で言う精算表が登場し、そこには整理記入欄 (Journal Adjustments) が含まれている。<sup>30</sup>

この、ワーキング・バランス・シートは、[図表 27] で示すように、前半と後半の二つのセクションに分かれた形式となっているが、確かに整理記入欄 (Journal Adjustments) が配置されている。前半では借方科目 (Debits Account) と金額 (Amount)、修正仕訳 (Journal

[図表 26] 精算表の発展の系譜

精算表のタイプ	棚卸欄のない精算表	棚卸欄のある精算表	決算整理記入欄のある精算表
著者	・ Thomas Goddard (1834) ・ J.P.Colt (1838)	・ Bryant・Stratton (1861) ・ George Soule (1881)	・ Paul Joseph Esquerre (1914) ・ Kester (1917) ・ Henty M.Lyons (1920) ・ Paton・Stevenson (1920) ・ Harry Anson Finney (1923) ・ Paton(1924)
時期	19 世紀前半	19 世紀後半	20 世紀

<sup>29</sup> 片野 (1952) P231 参照のこと

<sup>30</sup> 渡邊 (1993) 参照のこと

[図表 27] ポール・ヨウツェフ・エスクーレ『会計の応用理論』(1914)のワーキングバランスシート(精算表)

【エスクーレの精算表】 Trial Balance Debits Account	WORKING Amount (\$)	BALANCE SHEET Journal Adjustments		Income Debits	Assets
		Dr	Cr		
Machinery and Plant	12,350.00				12,350.00
Tools	2,600.00	2,000.00	2,000.00		2,000.00
			600.00		
Furniture and Fixtures	1,950.00	1,500.00	1,500.00		1,500.00
			450.00		
Office Furniture, Horses, Wagon	1,100.00	1,000.00	1,000.00		1,000.00
			100.00		
Horse and Wagon and Hameis	8,500.00				8,500.00
Good-Will	10,000.00				10,000.00
Inventory Finished Goods	3,684.57	9,386.00	9,386.00		9,386.00
		5,701.43			
Inventory Raw Materials	11,392.70	16,250.00	16,250.00		16,250.00
		4,857.30			
Stationery and Printing	1,080.00	300.00	300.00		300.00
			780.00		
Cash in Bank	1,825.00				1,825.00
Cash in Bank	26,467.00				26,467.00
Notes Receivable	130,000.00				130,000.00
Accounts Receivable	101,026.00				101,026.00
Freight and carriage inward	727.00			727.00	
Purchases of Raw Materials	62,519.85			62,519.85	
Returned Sales	276.00			276.00	
Wages	109,317.88			109,317.88	
Power, light and Heat	8,710.64			8,710.64	
repairs	1,090.00			1,090.00	
Tools Consumed		600.00		600.00	
Superintendence	3,500.00		3,500.00	0.00	
Factory Expenses	3,270.00			3,270.00	
Factory Rent		10,335.00		10,335.00	
Factory Insurance	1,050.00			1,050.00	
Superintendence, Factory		2,100.00		2,100.00	
facking	2,017.00			2,017.00	
Rent of Salesrooms		4,290.00		4,290.00	
Advertising	8,630.00			8,630.00	
Commissions	7,642.00			7,642.00	
Salesmen's Salaries	8,930.00			8,930.00	
Stable Expense	2,750.00			2,750.00	
Office Salaries	9,700.00	1,400.00		11,100.00	
Rent - Offices		4,875.00		4,875.00	
Light and Heat-office	168.00			168.00	
General Expense	5,230.00			5,230.00	
Rent	19,500.00		19,500.00	0.00	

(Paul-Joseph Esquerre "The Applied Theory of Accounts" (1914) より著者作成)

[図表 28] Henty M.Lyons の "Lyons' Bookkeeping and Accounting" (1920) のワークシート(精算表)

Work Sheet for the current year ended Dec.31,19-					
	Trial Balance December 31	Adjustments	Adjusted Trial Balance December 31	Profit and Loss Statement	Balance Sheet
Cash	1,500.00		1,500.00		1,500.00
Notes Rec.	2,000.00		2,000.00		2,000.00
Accounts Rec.	6,000.00		6,000.00		6,000.00
Mdse. Inventory	7,000.00	1,000.00	8,000.00		8,000.00
Office Equipment	1,000.00		1,000.00		1,000.00
Store Equipment	2,000.00		2,000.00		2,000.00
Notes Payable		1,500.00		1,500.00	1,500.00
Accounts Payable		2,500.00		2,500.00	2,500.00
C. S. Cooke, Proprietor		10,800.00		10,800.00	10,800.00
C. S. Cooke, Personal	200.00		200.00		200.00
Sales		75,000.00		75,000.00	
Purchases	60,000.00	1,000.00	59,000.00	59,000.00	
Freight	700.00	700.00			
Expense	8,500.00	8,500.00			
Advertising	900.00	100.00	800.00	800.00	
Freight-In		500.00	500.00	500.00	
Freight-Out		200.00	200.00	200.00	
Salaries		5,000.00	5,000.00	5,000.00	
Rent		2,000.00	2,000.00	2,000.00	
Miscellaneous Expense		1,500.00	1,500.00	1,500.00	
Accrued Interest		50.00			50.00
Interest			50.00	50.00	
Deferred Expense		100.00	100.00		100.00
	89,800.00	89,800.00	10,350.00	10,350.00	89,850.00
			89,850.00	69,000.00	75,050.00
					20,850.00
					14,800.00

(LYONS "Lyons' Bookkeeping and Accounting" (1920) より著者作成)

Adjustments), 損益借方 (Income Debits), 資産 (Assets) が示され, 後半では貸方科目 (Credits) と金額 (Amount), 修正仕訳 (Journal Adjustments), 損益貸方 (Income Credits), 負債 (Liabilities) が配置されている。

(2) ヘンティ・ライズズの精算表

ヘンティ・ライズズ (Henty M.Lyons) の "Lyons' Bookkeeping and Accounting" (1920) では, [図表 28] で示すように整理記入欄がある 10 桁精算表が登場する。ほぼ現在と同じ形式の精算表である。表題は Work

Sheet とされている。また, Work Sheet の内容は, 試算表 (Trial Balance) は残高試算表となっており, つぎに修正記入 (Adjustments), 決算整理後試算表 (Adjusted Trial Balance), 損益計算書 (Profit and Loss Statement), 貸借対照表 (Balance Sheet) の構成となっており, 今日の精算表と同様の内容となっている。

① ライズズの精算表における商品売買益の計算

商品売買の処理について, Mdse Inventory, Purchases, Sales で処理している。<sup>31</sup> この手続きを現代の三分法の考

<sup>31</sup> 久野 (1985) P376 によれば, 米国において最初に商品勘定, 仕入勘定, 売上勘定という 3 分法を示しているのは, Goodwin といわれている。Joseph Henry Goodwin(1882) "Goodwin's Improved Book-keeping and Business Manual" 参照のこと。

〔図表 29〕 Paton・Stevenson の “Principles of Accounting” (1920) のワーキング・シート (精算表)

WORKING SHEET—C.A.BLACK,Proprietor As of December 31,1917											
Account Title	Trial Balance		Adjusting Entries		Adjusted Trial Balance		Balance Sheet		Income Statement		
	Dr	Cr	Dr	Cr	Dr	Cr	Dr	Cr	Dr	Cr	
Accounts Payable		10,600				10,600		10,600			
Accounts Receivable	29,000				29,000		29,000				
Cash	8,200				8,200		8,200				
C. A. Black, Capital		22,500				22,500		22,500			
Interest Received		500	(a)	30		530			910	530	
Interest Paid	800		(b)	110		910					
Merchandise Inventory	20,000		(c)	3,000		23,000		23,000			
Miscellaneous Expense	1,300				1,300				1,300		
Notes Payable		12,000				12,000		12,000			
Office Equipment	800				800		800				
Other Selling Expense	3,500				3,500				3,500		
Office Salaries	4,700		(e)	150		4,850			4,850		
Purchases	87,000				87,000				87,000		
Purchase Returns		1,300				1,300				1,300	
Rent	600		(f)	40		560			560		
Store Equipment	3,000				3,000		3,000				
Sales		128,000				128,000		3,000		128,000	
Sales Returns	2,500				2,500				2,500		
Salesmen's Salaries	12,000		(g)	320		12,320			12,320		
Sales Discounts	1,500				1,500				1,500		
Accrued Interest Receivable			(a)	30		30		30			
Accrued Interest Payable				(b)	110		110		110		
Expense and Revenue				(c)	3,000		3,000			3,000	
Depreciation Expense			(d)	380		380			380		
Reserve for Depreciation				(d)	380		380		380		
Office Salaries Payable				(e)	150		150		150		
Prepaid Rent			(f)	40		40		40			
Salesmen's Salaries Payable				(g)	320		320		320		
Taxes			(h)	260		260			260		
Taxes Accrued				(h)	260		260			260	
Net Profit								46,320	115,080		
	174,900	174,900	4,290	4,290	179,150	179,150	64,070	64,070	132,830	132,830	

(Paton・Stevenson “Principles of Accounting” (1920) より著作作成)

え方で決算整理仕訳を行い、商品売買益（売上総利益）を計算すると以下の通りとなる。

〔仕訳 1〕 (Dr) Purchases 7,000  
 (Cr) Mdse Inventory 7,000  
 (Dr) Mdse Inventory 8,000  
 (Cr) Purchases 8,000

Purchases				
Inventory(BI)	7,000	Cost of goods Sold	59,000	Sales 75,000
Purchases	60,000	Inventory(EI)	8,000	
		GrossMargin 16,000		

仮に、この決算整理仕訳を相殺すれば、次のような仕訳となる。この精算表では、〔仕訳 2〕の内容で整理記入が行われると思われる。

〔仕訳 2〕 (Dr) Mdse Inventory 1,000  
 (Cr) Purchases 1,000

Purchases				
Purchases	60,000	Cost of goods Sold	59,000	Sales 75,000
		Inventory	1,000	
		GrossMargin 16,000		

この仕訳によって、Mdse Inventory の行の残高試算表の \$ 7,000 に整理記入欄の借方 \$ 1,000 を加えることによって貸借対照表には期末商品 \$ 8,000 が記入される。また、損益計算書の Purchases には残高試算表の \$ 60,000 から整理記入欄の貸方 \$ 1,000 がマイナスされ、売上原価 \$ 59,000 が記入される。結果として、損益計算書では売上高 \$ 75,000 から売上原価の \$ 59,000 が差し引かれて、商品売買益（売上総利益） \$ 16,000 が計算されることになる。

実質的には、現代の商品売買益（売上総利益）の計算手続きと同様の計算をしているが、〔仕訳 1〕のような決算整理仕訳ではなく、相殺した形の考え方で処理をしている。日本においても、1923 年発行の宝文館『最近三箇年全国官公立高等商業学校入学試験簿記問題詳

解』においても、相殺した形で同様の処理をしているのは興味深いところである。

### (3) ペイトン・スチーブンスンの精算表

Paton・Stevenson の “Principles of Accounting” (1920) においても〔図表 29〕で示すような整理記入欄がある 10 桁精算表が登場する。

#### ① ペイトン・スチーブンスンの精算表における商品売買益の計算

商品売買の処理について、Merchandise Inventory, Purchases, Sales で処理している。この手続きを現代の三分法の考え方で決算整理仕訳を行い、商品売買益（売上総利益）を計算すると以下の通りとなる。

〔仕訳 1〕 (Dr) Purchases 20,000  
 (Cr) Merchandise Inventory 20,000  
 (Dr) Merchandise Inventory 23,000  
 (Cr) Purchases 23,000

Inventory(BI)	20,000	Cost of goods Sold	84,000	Sales 128,000
Purchases	87,000	Inventory(EI)	23,000	
		GrossMargin 44,000		

仮に、この決算整理仕訳を相殺すれば、次のような仕訳となる。この精算表では、〔仕訳 2〕の内容で整理記入が行われると思われる。

〔仕訳 2〕 (Dr) Merchandise Inventory 3,000  
 (Cr) Purchases 3,000

Purchases				
Purchases	87,000	Cost of goods Sold	84,000	Sales 128,000
		Inventory	3,000	
		GrossMargin 44,000		

これによって、貸借対照表の Merchandise Inventory 欄には、試算表の \$ 20,000 に整理記入欄の \$ 3,000 を加えた期末商品 \$ 23,000 が貸借対照表に記載される。

この〔仕訳 2〕の内容を、精算表の記入に合わせて修

[図表 30] Paton “Accounting” (1924) のワーキング・シート (精算表)

F	Account Titles	Trial Balance		Adjusting Entries		Adjusted Trial Balance		Income Sheet		Balance Sheet	
		Dr.	Cr.	Dr.	Cr.	Dr.	Cr.	Dr.	Cr.	Dr.	Cr.
6	Merchandise Inventory	25,000		5,000		30,000				30,000	
9	Purchases	60,000		3,100	5,000	58,100		58,100			
10	Purchase Discounts		1,200				1,200		1,200		
14	Sales	100	100,000					99,900	99,900		
16	Transportation - B	3,000	500		3,100		600				600
17	Wages	10,000	500	700		10,200		10,200			
20	Supplies	2,000			500		1,500		1,500		
22	Advertising	2,000	200	200	100		1,900		1,900		
23	Insurance	3,000			1,500		1,500				1,500
28	Rent - C	2,000	3,000		3,000		4,000				4,000
34	Office Salaries	1,000	100		500		850		850		
36	General Expense	4,000		1,500			5,500		5,500		
40	Taxes	200		800			1,000		1,000		
44	Equipment - Cost	15,000					15,000				15,000
45	Equipment - Allowance for Depreciation		4,500		750		5,250				5,250
62	Accounts Receivable - Face	110,000	80,500				29,500				29,500
63	Accounts Receivable - Allowance for Doubtful	2,400	2,500		1,900		2,000				2,000
66	Cash on Hand	90,500	90,000		500		450				450
70	Bank Account	120,000	95,000				25,000				25,000
75	Interest Receivable	500	400	300			400				400
77	Bonds	15,000	5,100	100			10,000				10,000
79	Accounts Payable	55,000	60,000				5,000				5,000
82	Notes Payable	2,000	15,000				13,000				13,000
84	Interest Payable	800	500		500		200				200
90	M-Capital		74,000				74,000				74,000
91	M-Current	9,500					9,500				9,500
95	Sundry Liabilities				700		1,700				1,700
					200						
					800						
96	Sundry Assets			500			650				650
				100							
				500							
97	Expense and Revenue			3,000	300	41	5,800	5,800			
				750	11	100	51				
				1,900	21						
				500	31						
				500	61						
	Net Income							16,250			16,250
		533,000	533,000	18,550	18,550	206,850	206,850	101,100	101,100	122,000	122,000

(Paton “Principles of Accounting” (1924) より著者作成)

正すると、以下の [仕訳 3] のような仕訳が考えられる。

[仕訳 3] (Dr) Merchandise Inventory 3,000  
(Cr) Expense and Revenue 3,000

つまり、[仕訳 2] の整理仕訳の貸方の Purchases \$3,000 は売上原価の減少を意味し、貸方に売上総利益の増加として、ここでは収益科目として Expense and Revenue の貸方に \$3,000 を記入している。

損益計算書では Sales \$128,000, Purchases \$87,000 と Expense and Revenue (総利益) \$3,000 が転記される形となっている。この [仕訳 3] の Expense and Revenue (総利益) \$3,000 の金額は、[仕訳 2] で Purchases (商品仕入) \$3,000 をマイナスする形で売上原価を減少させ、最終的な売上総利益を増加させる処理をしている。

また、Sales \$128,000 から Purchases \$87,000 を差し引いて算出された \$41,000 に Expense and Revenue (Margin: 総利益) \$3,000 を加えることによって、Gross Margin (売上総利益) \$44,000 を算出している。

[仕訳 3] 「(Dr) Merchandise Inventory (Cr) Expense

and Revenue」の仕訳は、前述の宝文館 (1923) の「(借) 商品在高 (貸) 商品在高益」の仕訳と同様と思われる。<sup>32</sup>

#### (4) ペイトンの精算表

ペイトンの “Accounting” (1924) では整理記入欄がある 10 桁精算表が登場する。ほぼ現在と同じ形式の精算表である。<sup>33</sup>

##### ① ペイトンの精算表における商品売買益の計算

商品売買の処理について、Merchandise Inventory, Purchases, Sales で処理している。この手続きを現代の三分法の考え方で決算整理仕訳を行い、売上総利益を計算すると以下の通りとなる。

[仕訳 1] (Dr) Purchases 25,000  
(Cr) Merchandise Inventory 25,000  
(Dr) Merchandise Inventory 30,000  
(Cr) Purchases 30,000

Inventory (BI)	25,000	Cost of goods Sold	58,100	Sales	99,900
Purchases	60,000	Inventory (EI)	30,000		
(Transportation)	3,100			Gross Margin	41,800

仮に、この決算整理仕訳を相殺すれば、次のような仕訳となる。

<sup>32</sup> 宝文館 (1923) p387 参照のこと

<sup>33</sup> 渡邊 (1993) p62 参照のこと

[図表 31] 米国における精算表の変遷

簿記書	特徴	表題
<b>【Inventory 欄なし】</b> ・ Thomas Goddard (1834) , <i>The Tutor's Guide to Book-Keeping</i> ・ J.P.Colt (1838) , <i>The Young Accountant's Own Book</i>	一覧表型最初期 (12 桁) 8 桁の一覧表	Balance Sheet Balance Sheet
<b>【Inventory 欄あり】</b> ・ Bryant, Stratton (1861) , <i>Common school book keeping</i> ・ George Soule (1881) , <i>The New Science and Practice of Accounts</i>	Inventory 欄のある 9 桁表 Property 欄のある 9 桁表	Balance Sheet Balance Sheet
<b>【Adjustment 欄あり】</b> ・ Paul Joseph Esquerre (1914) , <i>The Applied Theory of Accounts</i> ・ Kester (1917), <i>Accounting Theory and Practice</i> ・ Henty M.Lyons (1920) , <i>Lyons' Bookkeeping and Accounting</i> ・ Paton・Stevenson (1920), <i>Principles of Accounting</i> ・ Harry Anson Finney (1923) , <i>Principles of Accounting</i> ・ Paton(1924), <i>Accounting</i>	Journal Adjustments 欄のある 5 桁・5 桁 <sup>34</sup> Adjustments 欄のある 10 桁表 Adjustments 欄のある 10 桁表 Adjusting Entries 欄のある 10 桁表 Adjustments 欄のある 10 桁表 Adjusting Entries 欄のある 10 桁表	Working Balance Sheet Work sheet Work sheet Working sheet Working Paper Working sheet

[仕訳 2] (Dr) Merchandise Inventory 5,000  
 (Cr) Purchases 5,000

この相殺した [仕訳 2] の内容で整理記入が行われている。この仕訳によって、貸借対照表の Merchandise Inventory 欄には残高試算表の \$ 25,000 に整理記入欄の \$ 5,000 を加えた期末商品 \$ 30,000 が記載される。また、損益計算書の Purchases には残高試算表の \$ 60,000 から整理記入欄の Transportation (仕入諸掛) \$ 3,100 を加えて、[仕訳 2] 貸方の \$ 5,000 がマイナスされ、Cost of goods Sold (売上原価) \$ 58,100 が記入される。結果として、損益計算書では Sales \$ 99,900 から Cost of goods Sold (売上原価) の \$ 58,100 が差し引かれて、売上総利益 \$ 41,800 が計算されることになる。

これも前述のヘンティ・ライonzの“Lyons' Bookkeeping and Accounting”と同様に [仕訳 1] のような決算整理仕訳ではなく、相殺した形の処理をしている。宝文館 (1923) の同様の処理法と同様である。<sup>35</sup>

## 7 米国から日本に伝播した精算表の系譜

### 7.1 Common school Book-keeping から帳合之法へ

前述のとおりブライアントとストラットンの“Common school Book-Keeping”を福沢諭吉が翻訳した『帳合之法』によって、日本の簿記教育は始まったといえよう。特に『帳合之法』に「パッカルド氏取用の平

均表」として掲載された計算表は現在の精算表のルーツとみなすことができ、その後の簿記書と簿記教育に大きな影響を与えたのは、前述のとおりである。

現代の簿記教育においては、精算表の学びは複式簿記の仕組みを理解するためにとても重要である。その萌芽が日本における最初の商業簿記の書である帳合之法に「パッカルド氏取用の平均表」として、紹介されたことはわが国の複式簿記の普及に大きく影響を与えたといっても言い過ぎではないだろう。この精算表は複式簿記の仕組みを理解するうえで全体像を一覧できる最適な教材であり、その萌芽が日本最初の商業簿記書である『帳合之法』で紹介された意義は小さくない。さらに「パッカルド氏取用の平均表」の考え方は、長く受け継がれ、昭和 10 年代まで教科書に掲げられていたことから、その影響の大きさを伺うことができる。

### 7.2 二つの形式の精算表

#### ～一覧表型と貸借配置型の精算表～

前述のように、精算表の形式には、①一覧表型精算表と②貸借配置型精算表がある。

日本では竹田等の『商用簿記学』(1882)や佐野善作『商業簿記教科書』(1897)の精算表などにおいて、貸借配置型の精算表が紹介されており、その後、田中俊二郎著『英文記帳法』(1902)に英文の Balance sheet の貸

<sup>34</sup> Paul Joseph Esquerre (1914) では借方側と貸方側がそれぞれ 5 桁の形式となっている。

<sup>35</sup> Kenton “Century 21 Accounting: First-Year Course” (1995) P394-P396 では、期首商品と期末商品の差額を (Income Summary/Merchandise Inventory) という整理記入で処理する方法を示している。

[図表 32] John Collins Bryan の精算表

(J. C. Bryant の精算表)

SET V.—TRIAL BALANCE and Analyses combined, illustrating the Quality of Accounts, showing that Resources and Losses are found only on the Debit side, and Liabilities and Gains are found only on the Credit side.

Losses.	Resources.	Dr. Balance.	Face of Ledger. Dr. Side	LEDGER ACCOUNTS.	Face of Ledger. Cr. Side	Cr. Balance.	Liabilities.	Gains.
	4732.00	4732.00	3500.00	..... Stock, .....	11000.00	7500.00		
500.00		500.00	8275.00	..... Cash, .....	35430.00			
			6000.00	..... Real Estate, .....	55000.00			
			2000.00	..... Bills Payable, .....	4500.00	2500.00	2500.00	
			1300.00	..... S. Shepard, .....	1500.00	200.00	200.00	
			3000.00	..... Barley, .....	3525.00	525.00		525.00
	5300.00	5300.00	5800.00	..... Bills Receivable, .....	500.00			
				..... Storage, .....	60.00	60.00		60.00
				..... Discount, .....	7.00	7.00		7.00
	250.00	250.00	550.00	..... Sam'l Morgan, .....	300.00			
50.00		50.00	50.00	..... Commission, .....	40.00	40.00		40.00
				..... Expense, .....				
			30475.00		30475.00			
		10832.00		Total Resources,	10282	10832.00		
				" Liabilities,	2700			
	10282.00			Present worth,	7582		2700.00	
550.00				Total Gain,	632			632.00
				" Loss,	550			
				Net Gain,	82			
				Investment,	7500			
				Present worth,	7582			

The Student should also make out Statements for this Set according to form used in preceding Sets.

(John Collins Bryan "Bryant's New Elementary Book-keeping" (1876))

[図表 33] Kester "Accounting Theory and Practice" (1917) の WORK SHEET (精算表)

U. R. SMART, WORK SHEET, DECEMBER 31, 19—.

ACCOUNT TITLE	TRIAL BALANCE		ADJUSTMENTS		PROFIT AND LOSS		BALANCE SHEET	
	Dr.	Cr.	Dr.	Cr.	Dr.	Cr.	Dr.	Cr.

(Kester "Accounting Theory and Practice" 1917)

[図表 34] Paton・Stevenson の『Principles of Accounting』(1920) の WORKING SHEET (精算表)

WORKING SHEET—C.A. BLACK, Proprietor  
As of December 31, 1917

Account Title	Trial Balance		Adjusting Entries		Adjusted Trial Balance		Balance Sheet		Income Statement	
	Dr.	Cr.	Dr.	Cr.	Dr.	Cr.	Dr.	Cr.	Dr.	Cr.

(Paton・Stevenson "Principles of Accounting" (1920) より著者作成)

借配置型の精算表を示したものがある。<sup>36</sup>さらに、市邨芳樹『商業簿記』(1907)や笠木五千平<sup>37</sup>『図解詳説近世商業簿記』(1918)でも一覧表型の精算表とともに、貸借配置型の精算表が同時に掲載されている。

この貸借配置型の精算表のルーツは、米国だと考えられる。それは John Collins Bryant の "Bryant's New Elementary Book-keeping" (1876) において、[図表 32] のような貸借配置型(貸借 4 欄ずつの分割式 8 欄)の精算表<sup>38</sup>を紹介しているからである。これが竹田等『商用簿記学』(1882)や佐野善作『商業簿記教科書』(1897)などの貸借配置型の精算表の参考となったものと考えられる。<sup>39</sup>

この状況から考えると日本では 1880 年代以降、米国から伝わった二種類の精算表が高等商業学校や商業学校において教育されていたと考えられる。一覧表型の精算表とともに、貸借配置型の精算表が同時に教育されており、しばらくは二種類の精算表が用いられていたようだが、その後、貸借配置型の精算表を取り上げた教科書は見られなくなり、現代の一覧表型の精算表に踏襲されていったと思われる。

その理由は指導のしやすさ、学ぶ生徒、学生の立場からは理解しやすさという要因が大きいのではないかと考えられる。

<sup>36</sup> 宝文館 (1923) P20 参照のこと

田中 (1902) は、明治 39 年に全国の商業学校の 31 % (35 校中 11 校) で英文簿記の教科書として採用されていた。

<sup>37</sup> 笠木五千平は大正時代に大阪計理学校の校長として簿記教育に携わった人物である。

<sup>38</sup> 久野 (1985) P354-P355 では、「Trial Balance and Analyses Combined と称している貸借 4 欄ずつの分割式 8 欄精算表を」紹介している。

<sup>39</sup> 久野は (1985) P354 において、貸借配置型の精算表について、「かかる分割式の精算表は他の著書には見られなかった」と述べている。

[図表 35] 海外から日本への簿記・精算表の伝わり

オランダ・イギリス	米国	日本
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ Symon Stevin(蘭) (1604) " <i>Livre de Compte de Prince à la Manière d'Italie</i>"</li> <li>・ William Maggi(英) (1718) " <i>The Principles of Book-keeping: By Double Entry</i>"</li> <li>・ Alexander Malcolm (英) (1731) " <i>A New Treatise on Book-keeping</i>"</li> <li>・ Robert Hamilton(英) (1777) " <i>Introduction to Merchandize</i>"</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>【Inventory 欄なし】</li> <li>・ Thomas Goddard(1834) " <i>The Tutor's Guide to Book-Keeping</i>"</li> <li>・ J.P.Colt (1838) " <i>The Young Accountant's Own Book</i>"</li> <li>【Inventory 欄あり】</li> <li>・ Bryant, Stratton (1861) " <i>Common school book keeping</i>"</li> <li>・ George Soule (1881) " <i>The New Science and Practice of Accounts</i>"</li> <li>【貸借配置型】</li> <li>・ John Collins Bryant(1876) " <i>Bryant's New Elementary Book-keeping</i>"</li> <li>【Adjustment 欄あり】</li> <li>・ Paul Joseph Esquerre(1914) " <i>The Applied Theory of Accounts</i>"</li> <li>・ Kester (1917), " <i>Accounting Theory and Practice</i>"</li> <li>・ Henty M. Lyons (1920), " <i>Lyons' Bookkeeping and Accounting</i>"</li> <li>・ Paton・Stevenson (1920) " <i>Principles of Accounting</i>"</li> <li>・ Paton(1922) " <i>Accounting Theory</i>"</li> <li>・ Harry Anson Finney (1923) " <i>Principles of Accounting</i>"</li> <li>・ Paton (1924) " <i>Accounting</i>"</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>【棚卸欄あり】</li> <li>・ 福澤諭吉(1873)『帳合之法』</li> <li>・ 山田十畝(1880)『人民必携簿記提要複式簿記の部』下』</li> <li>・ 竹田等(1882)『商用簿記学』</li> <li>・ 竹村真次(1892)『帳簿改良法 商家案内』</li> <li>・ 佐野善作(1897)『商業簿記教科書』</li> <li>・ 竹田等(1901)『商用簿記学修正』</li> <li>・ 吉田良三(1904)『最新商業簿記学』</li> <li>【整理記入欄あり】</li> <li>・ 上野道輔(1922)『簿記原理』</li> <li>・ 中村茂男 (1925)『商業簿記講義』</li> <li>・ 太田哲三(1930)『商業簿記』</li> <li>・ 吉田良三(1936)『商業簿記提要』</li> </ul>

### 7.3 整理記入欄を備えた精算表の伝播

私の調査した中では、日本において整理記入欄入りの精算表が初めて示されたのは上野道輔『簿記原理』(1922)ではないかと思っている。なぜならば、『簿記原理』の参考文献リストに Kester "Accounting Theory and Practice" (1917), Paton & Stevenson "Principles of Accounting" (1918) の簿記書が記載されており、それらの著書には整理記入が入った精算表が示されていることから、上野道輔『簿記原理』(1922)はその影響を受けたのではないかと考えている。

なお、Paton & Stevenson の "Principles of Accounting" (1920) では次のように、当時、米国においては貸借対照表及び損益計算表を作成するために Working Sheet を用いた処理が行われていると紹介している。

上野によれば「締切完了の勘定から貸借対照表及び損益計算表を作成する為に Working Sheet なるものを利用することが最近米国に於いて行われるようである。Working Sheet は一表の中に試算表、修正記入項目、貸借対照表及び損益計算書をまとめ、試算表の計数に修正を加え之を貸借対照表及び損益計算書に配分する経路を示すものであって、言わば決算残高一覧表とでも稱し得べきものである」(上野,1922,106) としている。

なお、当時日本では、棚卸表欄での商品売買益の計算が主流で、まだ、整理記入欄を用いた精算表は見られない状況の中で、上野は米国の整理記入欄を含んだ Working Sheet (精算表) を日本に紹介することでその後の簿記教育に大きな影響を与えたといえるだろう。

### 7.4 仕入勘定で売上原価を計算するための整理記入

現代の日本の簿記教科書では、決算整理事項で最初に登場するのが次のような仕訳である。これは三分法を用いて仕入勘定で売上原価を算出する場合の決算整理仕訳である。

(期首商品棚卸高 100, 期末商品棚卸高 120, 当期仕入高 500 とすると)

(借) 仕 入	100	
(貸) 繰越商品	100	…期首商品棚卸高
(借) 繰越商品	120	
(貸) 仕 入	120	…期末商品棚卸高

日本で簿記を学習した人ならば、この(し、くり)(くり、し)の仕訳を知らない人はいないくらい必ず学習する決算整理仕訳である。しかしながら、今日の日本では当たり前この仕訳も世界的に見れば当たり前ではないようである。

前述のように中村茂男が1925年に出版した『商業簿記講義』において、修正記入欄入を備えた精算表が示されているが、その決算整理においては三分法によって、仕入勘定で売上原価を処理する(し、くり)(くり、し)の仕訳の記入と思われる内容となっている。私の調査した中では、中村茂男の『商業簿記講義』(1925)が、仕入勘定で売上原価を処理する方式で整理記入している精算表が初めて示された書籍だと思われる。なぜならば、この参考文献リストにHenty M.Lyons『Lyons' Bookkeeping and Accounting』(1920)、Kester『Accounting Theory and Practice』(1922)、Paton & Stevenson『Principles of Accounting』(1922)、Paton『Accounting Theory』(1922)の簿記書が記載されており、そこには整理記入が入った精算表などから影響を受けていることが考えられる。

しかし、中村茂男の『商業簿記講義』で示されているが、仕入勘定で売上原価を処理する方法は、米国の文献を参考にしながらも、日本で工夫された仕訳方法ではないだろうか。この後、この(し、くり)(くり、し)の仕訳は、簿記教育を通して、日本での標準的処理法になっていくことになる。

## 8 おわりに

現代の簿記教育において、精算表の学習は複式簿記の構造を理解するうえで極めて重要である。改めて、日本における最初の商業簿記書である『帳合之法』において、「パッカルド氏取用の平均表」として精算表の萌芽が紹介されたことに注目したい。この精算表は、その後の多くの簿記書に影響を及ぼし、簿記教育の発展に大きく寄与したといえる。

近年、実務においては精算表を作成する重要性は少なくなっているとの指摘もあるが、簿記教育において複式簿記を理解する上での重要性は変わることはない。また、日本の簿記教育においては、精算表を通して見えてくるのが、商品売買取引の処理法についての考え方である。前述のごとく、さまざまな方法がある。

もちろん、我が国の簿記教科書では、仕入勘定で売上原価を計算する方法を重点にして説明されているものがほとんどである。分記法や売上原価勘定によって売上原価を算定する方法、あるいは売上原価対立法を扱う教科書も存在するが、精算表の事例としては、仕入勘定で売上原価を処理する方法以外はほとんど見られないのが現状である。明治期以降の精算表の事例を検討してきた結果、売上原価および売上総利益の算出には多様な処理法が存在することが明らかとなった。しかし、それらの手続を形式的に学ぶのではなく、そ

の根底にある考え方を理解することこそが重要であることを、あらためて強調したい。日本で主流の「仕入勘定で売上原価を処理する方法」を(し、くり)(くり、し)と暗記するのではなく、売上原価を算出するプロセスとその意味を理解することが大事なのである。

本稿では、精算表の系譜と発展について考察を行った結果、次の2点を確認することができた。第1に、『帳合之法』の「パッカルド氏取用の平均表」(精算表)に見られる棚卸欄を備えた形式から始まった日本の精算表は、海外の影響を受けながら整理記入欄を有する形式へと発展し、最終的に今日の標準的な精算表になったことが確認された。また、売上原価計算の処理法についても、各種の手法を経て、日本独自の方式が確立したことが明らかとなった。第2に、大正期以降、整理記入欄を設けた精算表が教育現場に導入されたものの、仕訳帳上の正規の決算整理仕訳とは異なり、精算表の整理記入欄への記入方法には多様な形式が存在していたことが確認された。各時代における試行錯誤を通じて、整理仕訳を整理記入欄に転記するという今日の標準的な精算表作成手続きへと収斂していったことが明らかである。

今後の課題として、次の2つが挙げられる。第1に、米国から日本に伝来した精算表とともに導入された商品売買処理法のうち、仕入勘定によって売上原価を算定する方式については、そのルーツとなる事例の特定が不十分であり、さらなる検討が必要である。第2に、日本において、決算整理仕訳と精算表の整理記入欄への記入がどの時点で整合的に行われるようになったのかという点については、十分な検証が行われておらず、今後の課題として検討を要する。これらの点について、今後の研究課題として継続的に研究を進めていきたい。

## 参考文献

- Donald E.Kieso, Jerry J.Weygandt, Terry D.Warfield. 2004. *Intermediate Accounting(Eleventh Edition)*, Wiley.
- Frederick Hayne Carter, Jonathon Green. 1874. *Practical Book-Keeping*, Ulan Press(Classic Reprint).
- G.G.folsom. 1873. *The Login of Accounts*, Forgotten Books(Classic Reprint).
- George Soule. 1881. *Soule's New Science and Practice of Accounts, Containing a Full Exposition ...Of Double Entry and Single Entry Book-Keeping; With the Most Approved ...*, Ulan Press(Classic Reprint).
- H.B.Bryant, H.D.Stratton, S.S.Packard. 1861. *Bryant & Stratton's Common school Book-Keeping, Single and Double Entry*, Chicago, IVISON, BLAKEMAN, TAYLOR & COMPANY (Classic Reprint)
- H.B.Bryant, H.D.Stratton, S.S.Packard. 1863. *Bryant & Stratton's National Book-Keeping; an Analytical and Progressive*

- Treatise on the Science of, Chicago, IVISON, BLAKEMAN, TAYLOR & COMPANY (Classic Reprint)
- H.B. Bryant, H.D. Stratton, S.S. Packard. 1860. *Bryant & Stratton's Counting House Book-Keeping*. Containing A complete Exposition Of The Science Of Accounts In Tts Application To The Various Departments Of Business (Classic Reprint)
- H.B. Bryant. 1862. *Bryant and Stratton's common school Book-keeping*
- Hatfield, H. R. 1916. *Modern Accounting*. New York, NY: D. Appleton and Company.
- Ira Mayhew. 1860. *Mayhew's Practical Book-Keeping*. Embracing Single and Double Entry, Commercial Calculations, and the Philosophy and Morals of Business, Forgotten Books (Classic Reprint).
- James Alexander Lpons. 1908. *Modern Corporation Accounting*. Including Instruction in Corporate Organization, Methods of Transacting Business, and Bookkeeping, Forgotten Books (Classic Reprint).
- Joel J. Lerner. 2007. *Bookkeeping and Accounting* (Fourth Edition)
- Mc Graw Hill, Kenton E Ross, Robert D. Hanson, Claudia Bienias Gilbertson, Mark W Lehman, Robert N Swanson. 1995. *Century 21 Accountig-First-year course (Sixth Edition)*, South-Western publishing.
- Lindley A. Lyons, Oliver s. smith. 1920. *Lyons Bookkeeping and Accounting*, Forgotten Books (Classic Reprint).
- Littleton, A. C. 1933. *Accounting Evolution to 1900*. New York, NY: American Institute Publishing Co. (片野一郎訳. 1978. 『リトルトン会計発達史 (増補版)』同文館出版.)
- Paton, W. A. 1922. *Accounting Theory*. New York, NY: Ronald Press.
- Paton, W. A. 1924. *Accounting*. New York, The Macmillan Company.
- Paton, W. A. 1920. *Principles of Accounting*. New York, The Macmillan Company.
- Paton, W. A. and A. C. Littleton. 1940. *An Introduction to Corporate Accounting Standards*. Chicago, IL: American Accounting Association. (中島省吾訳. 1958. 『会社会計基準序説 (改訳版)』森山書店.)
- Paton, W. A. and R. A. Stevenson. 1916. *Principles of Accounting*. New York, ARNO PRESS.
- Paul Joseph Esquerre. 1914. *The Applied Theory of Accounts*, Forgotten Books (Classic Reprint)
- Silas Sadler Packard. 1923. *Packard's New Manual of Book-Keeping and Correspondence*. New York, BIBLIOBAZAAR.
- Sprague, C. E. 1907. *The Philosophy of Accounts*. Lawrence, KS: Scholars Book Co.
- W.A. Hamilton. 1912. *The Principles of Modern Bookkeeping*. London, GEE & CO, Forgotten Books (Classic Reprint)
- William Morse Cole. 1908. *Accounts*, New York, ARNO PRESS, A New York Times Company
- 愛知信光. 1876. 『簿記教授本下』
- 愛知信光. 1879. 『簿記教授本下』
- 青木茂男編. 1976. 『日本会計発達史』同友館
- 青柳源十郎. 1886. 『簿記学独習』
- 安藤英義. 2001. 『簿記会計の研究』中央経済社
- 五十嵐邦正. 2003. 「精算表の発展」『商学集誌』(日本大学)
- 五十嵐邦正. 2005. 「精算表の発展と資産負債アプローチ」『会計理論と商法・倒産』森山書店
- 池田愿. 1902. 『商業簿記例題』金港堂書籍
- 石内孔治. 2014. 「商品売買の会計処理に関する一考察」『日本経済大学大学院紀要 Vol.2, No.2』
- 石垣康雄. 1984. 「わが国における簿記教育歴史的展開 - 簿記教科書の内容を中心として」『経理知識』第63号
- 石垣康雄. 1985. 「わが国における簿記教育歴史的展開(2) - 簿記教科書の内容を中心として - (含む年表) (資料)」『経理知識』第64号
- 石川於兔喜. 1911. 『実用商業簿記拾参例題』宝文館
- 泉屋清次郎, 早藤石太郎. 1915. 『最新商業簿記教科書』博道館
- 井田忠信. 1876. 『簿記学捷徑』
- 井田忠信. 1879. 『簿記学捷徑』
- 井田忠信. 1879. 『簿記学捷徑』
- 市川友三郎. 1911. 『最新商業簿記 中等教育』宝文館
- 市邨芳樹. 1907. 『商業簿記』金港堂書籍
- 上野清貴編. 2019. 『日本簿記学説の歴史探訪』創成社
- 上野道輔. 1922. 『簿記原理』有斐閣書房
- 上野道輔. 1923. 『会计学』有斐閣書房
- 宇佐川秀次郎. 1878. 『尋常簿記法完』
- 海野力太郎. 1886. 『1886 簿記学起原考』
- 海野力太郎. 1886. 『簿記学起原考』
- 大石善四郎. 1911. 『実用商業簿記』博文館
- 太田哲三. 1923. 『実践商業簿記』瞭文堂
- 太田哲三. 1924. 『貸借対照表作り方と見方』大阪屋號書店
- 太田哲三. 1929. 『最新商業簿記 下巻』瞭文堂
- 太田哲三. 1930. 『商業簿記』瞭文館
- 太田哲三. 1932. 『会计学概論』高陽書院
- 太田哲三. 1934. 『財務諸表準則解説』高陽書院
- 太田哲三. 1934. 『商業簿記』高陽書院
- 太田哲三. 1934. 『新訂商業簿記 下』高陽書院
- 太田哲三. 1943. 『改訂商業簿記』経済圖書
- 大原信久. 1909. 『改良新式銀行簿記教科書』大原簿記学校
- 大原信久. 1920. 『最近商業簿記』大原簿記学校
- 大原信久. 1923. 『最新商業簿記』大原簿記学校
- 岡田誠一. 1924. 『商業簿記法大意』巖松堂書店
- 加藤斌. 1870. 『商家必用』新报社
- 樺山純一. 1904. 『英文簿記例題』実業之日本社
- 川島健司. 2019. 「会計用語の起源特定化のための分析枠組み」『経営志林 第56巻2号』
- 工藤栄一郎. 2015. 『会計記録の研究』中央経済社
- 工藤栄一郎, 柴健次. 2022. 「明治初期における商業教育制度化への道のり - 大阪商業講習所の設立まで -」『会計教育研究』第10号
- 國部克彦. 1994. 『アメリカ経営分析発達史』白桃書房
- 久野光朗. 1984. 「一九世紀のアメリカ簿記書における試算表・精算表および財務諸表」『会計』125巻1号 森山書店
- 久野光朗. 1985. 『アメリカ簿記史 - アメリカ会計史序説 -』同文館
- 黒澤清. 1982. 『日本会計学発展史序説』雄松堂書店
- 黒澤清. 1990. 『日本会計制度発展史』財経詳報社
- 桑原正行. 2008. 『アメリカ会計理論発達史 - 資本主義理論と近代会計学の成立』中央経済社.
- 小島男佐夫. 1961. 『複式簿記発生史の研究』森山書店
- 小島男佐夫. 1964. 『簿記史論考』森山書店
- 小島男佐夫. 1973. 『現代会計の史的的研究』森山書店
- 小島男佐夫. 1978. 『会計史資料研究』大学堂書店

- 小島男佐夫編. 1979.「会計史および会計学史」『体系近代会計学(第6巻)』中央経済社
- 小島男佐夫編. 1959.「精算表の生成発展:残高表・試算表・精算表」『商学論究27』(関西学院大学)
- 小高泰雄・高橋芳之助. 1950.『簿記概論』慶応通信教育図書
- 小林儀秀訳. 1873.『馬耳蘇氏複式簿記法』
- 小林儀秀訳. 1876.『馬耳蘇氏複式簿記法』
- 近藤昌孝『簿記教科書-復刻版-』(著者不明:新潟商業高校の所蔵)〔記製者:近藤昌孝,復刻者:南雲宏道〕
- 倉西松次郎. 1882.『簿記学』
- 坂本陶一. 1915.『商業簿記及会計教科書』宝文館
- 櫻井康弘. 2024.「わが国における商品売買取引の処理方法の実態と呼称-売上原価項目入力法-」『簿記研究』第7巻第2号
- 佐々木勝三郎. 1916.『最新商業簿記提要』春和堂
- 佐々木勝三郎. 1918.『最新商業簿記提要 下巻 訂再販』春和堂
- 佐野善作. 1897.『商業簿記教科書』同文館
- ジェイコブ・ソール, 村井章子訳. 2015.『帳簿の世界史』文藝春秋
- 下尾直太郎. 1895.『簿記精理』
- 下野直太郎. 1892.『簿記精理』
- 下野直太郎. 1894.『簿記』
- 実業教育振興中央会. 1943.『商業簿記』実業教科書
- 商業帳簿改良局. 1888.『改良新法商業帳簿』
- 図師民嘉. 1881.『簿記法原理』
- 図師民嘉. 1886.『簿記法原理』
- 鈴木孫彦, 近藤英三. 1911.『新案商業簿記提要』宝文館
- 高瀬荘太郎. 1932.『新商業簿記大意』至文堂
- 高瀬荘太郎. 1933.『新編中等商業簿記』三省堂
- 竹田等. 1879.『商用簿記学』
- 竹田等. 1882.『商用簿記学』
- 竹田等. 1884.『簿記学原論』
- 竹田等. 1885.『商用簿記学\_校訂』
- 竹田等. 1901.『商用簿記学修正』丸善
- 竹村真次. 1892.『帳簿改良法 商家案内』
- 田尻常雄, 古館市太郎. 1906.『英文簿記教科書』三友書院
- 田代仙次郎. 1908.『商業簿記例解』
- 田代仙次郎. 1911.『商業簿記例解』
- 田中俊二郎. 1902.『英文記帳法』五車楼
- 千葉準一, 中野常男編. 2012.「会計と会計学の歴史」『体系現代会計学』第8巻
- 東洋社. 1910.『商業簿記』東洋社
- 中野常男. 1992.『会計理論生成史』中央経済社.
- 中村茂男. 1925.『商業簿記講義』共立社
- 中村茂男・川戸藤吉. 1910.『参考簿記学精義』昭文堂
- 中村忠. 2004.『簿記の考え方・学び方(三訂版)』税務経理協会
- 中村英敏. 2017.「商品売買取引における簿記処理の再検討」日本簿記学会第33回全国大会統一論題報告,年報
- 西川孝治郎. 1971.『日本簿記史談』同文館
- 西川孝治郎. 1982.『文献解題 日本簿記学生成史』雄松堂
- 日本公認会計士協会編. 2019.『会計基礎教育の歴史と現況』日本公認会計士協会出版局
- 野田久仁香. 2024.「商品売買取引の処理方法に関する一考察-「決算中心主義の簿記」と「管理中心主義の簿記」の視点から-」
- 濱田弘作. 1986.『アメリカ会計発達史』白桃書房
- 濱田弘作. 2002.『米国会計発達史論』創成社
- 原俊雄. 2019.『簿記と帳簿組織の機能-歴史的・国際的視点から』中央経済社
- 原俊雄. 1997.「商品売買取引処理法の再検討」『情報研究』第18巻
- 東爽五郎. 1902.『商業簿記十例題』大倉書店
- 東爽五郎. 1906.『新案詳解商業簿記』大倉書店
- 東爽五郎. 1909.『新案・詳解商業簿記』大倉書店
- 一橋大学付属図書館(2003)「複式簿記がやってきた!初期簿記導入史と商法講習所」
- 福澤諭吉訳. 1873.『帳合之法』慶応義塾出版局
- 藤井清. 1878.『略式帳合法附録』
- 藤井清. 1878.『和欧帳面くらべ』
- 太神和好. 1940.『商業簿記概説』叢文閣
- 古館市太郎. 1910.『新撰簿記教科書』大倉書店
- 宝文館. 1923.『最近三箇年全国官公立高等商業学校入学試験簿記問題詳解』宝文館
- 宝文館. 1925.『模範商業簿記問題及解説』宝文館
- 簿記会計史研究会編. 2025.『歴史に見る会計構造観の展開』五絃舎
- 益野倍太郎. 1901.『複式商業簿記法』金港堂書籍
- 松井惟利. 1879.『小学正則単式簿記学下編』
- 松井惟利. 1876.『小学正則単式簿記学 上篇・下編』
- 水江正臣. 1922.『最新簿記学原理』都築堂
- 三原国一郎. 1886.『初学商業書』
- 村瀬玄. 1935.『中等簿記教科書』松邑三松堂
- 森嶋修太郎・森下岩楠. 1878.『簿記学階梯 改』
- 森嶋修太郎. 1878.『簿記学例題』
- 森嶋修太郎. 1893.『小学校用簿記学』
- 森嶋修太郎. 1888.『簿記第壹』
- 森嶋修太郎. 1891.『簿記第壹』
- 森嶋修太郎・森下岩楠. 1875.『簿記学階梯 上・下』
- 森嶋修太郎・森下岩楠. 1881.『民間簿記学』
- 森嶋修太郎・森下岩楠. 1884.『民間簿記学』
- 森嶋修太郎. 1889.『小学校用簿記学』
- 森嶋修太郎. 1898.『簿記学例題』
- 森田広大. 2012.「『帳合之法』における商品売買の処理に関する考察」『経営学研究論集(37)』
- 森源次郎. 1901.『最新商業簿記学』大倉書店
- 文部省. 1912.『小学簿記教師用』日本書籍
- 文部省. 1913.『小学簿記教師用』日本書籍
- 安田綱太郎, 藤塚貞吉. 1912.『新体実用商業簿記十二例題』宝文館
- 安田綱太郎, 藤塚貞吉. 1912.『新体実用商業簿記』宝文館
- 安平昭二. 1988.「商品売買処理法についての一考察-「売上高・売上原価表示のすすめ」」『商大論集』
- 安平昭二. 1992.『簿記:その教育と学習』中央経済社
- 山田十畝. 1880.『人民必携簿記提要 複式の部 上』
- 山本繁. 1993.『近代会計基準と会計制度』同文館
- 横山和夫. 1994a.「簿記理論と実践(32-34) 商業簿記と精算表」『税経セミナー』04-06月号, 税務経理協会
- 横山和夫. 1994b.「簿記理論と実践(35-36) 工業簿記と精算表」『税経セミナー』07-08月号, 税務経理協会
- 吉田良三・田島四郎. 1952.『簿記概論(改訂版)』同文館
- 吉田良三. 1904.『最新商業簿記学』同文館
- 吉田良三. 1907.『最新商業簿記』同文館
- 吉田良三. 1908.『最新商業簿記例題』同文館
- 吉田良三. 1910.『会計学』同文館
- 吉田良三. 1911.『最新商業簿記』同文館
- 吉田良三. 1912.『最新商業簿記』同文館

吉田良三. 1914. 『最新式近世簿記精義』 同文館  
吉田良三. 1914. 『近世商業簿記』 同文館  
吉田良三. 1914. 『最新式近世簿記精義』 同文館  
吉田良三. 1920. 『近世商業簿記 最新式』 同文館  
吉田良三. 1923. 『商業簿記教科書』 同文館  
吉田良三. 1926. 『早稲田大学講義』  
吉田良三. 1929. 『商業簿記教科書 上巻・下巻』 文信社  
吉田良三. 1931. 『会計学の常識』 千倉書房  
吉田良三. 1932. 『三訂商業簿記教科書 下巻』 同文館  
吉田良三. 1934. 『商業簿記提要』 同文館  
吉田良三. 1935. 『女子簿記教科書』 同文館  
吉田良三. 1936. 『実践商業簿記』 同文館  
吉田良三. 1936. 『商業簿記提要』 同文館  
吉田良三. 1938. 『改訂中等簿記教科書』 同文館  
吉田良三. 1942. 『簿記概論』 同文館  
吉村一郎. 1881. 『簿記学手引』

吉村一郎. 1886. 『簿記独案内』  
渡邊泉. 1983. 『損益計算史論』 森山書店  
渡邊泉. 1993. 『決算会計史論』 森山書店  
渡邊泉. 2005. 『損益計算の進化』 森山書店  
渡邊泉. 2014. 『会計の歴史探訪』 同文館出版  
渡邊裕巨, 片山覚, 北村敬子編. 2025a. 『検定簿記講義 3級商業簿記』 中央経済社  
渡邊裕巨, 片山覚, 北村敬子編. 2025b. 『検定簿記講義 2級商業簿記』 中央経済社

#### 参考サイト

一橋大学付属図書館「令和3年度企画展示「渋沢栄一と一橋大学」」  
<https://www.lib.hit-u.ac.jp/about/tenji/kikaku/kikaku>  
2021-01/ (閲覧日: 2025年8月10日).

